

文部科学省委託事業
「各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業
(都道府県の枠組みを超えた探究プラットフォーム構築)」

令和7年度報告書

認定NPO法人カタリバ

未来は、つくれる。

KATARIBA

Shape the Future

1. 概要.....	3
1.1. 背景と目的.....	3
1.2. 取り組みの概要.....	3
1.3. ネットワーク構成校.....	3
2. 令和7年度実施事項	5
2.1. 探究的な学びを行う学校間のネットワーク構築.....	5
2.2. 学校間での探究的な学びの機会の構築・実施.....	5
2.3. 探究的な学びを行う学校間のネットワーク構築.....	6
3. 実施経過.....	7
3.1. 学校間での探究的な学びの機会の構築・実施.....	7
①オンライン合同授業.....	7
②生徒間連携.....	24
3.2. プラットフォーム構築に向けた取り組み.....	31
①コアサポーター活用.....	31
②教員間連携.....	35
4. 令和7年度成果および課題の検証.....	40
4.1 オンライン連携が生徒および教員にもたらす効果に関する調査.....	40
4.1.1 概要.....	40
4.1.2 オンライン連携を通じた生徒に対する効果.....	40
4.1.2.1 生徒の探究活動に対する効果.....	40
4.1.2.2 生徒自身に対する効果.....	43
4.1.2.3 令和6年度との比較.....	45
4.1.3. オンライン連携を通じた教員に対する効果.....	47
4.1.3.1 教員の探究への関わり方に対する効果.....	47
4.1.3.2 教員自身に対する効果.....	48
4.1.3.3 令和6年度との比較.....	48
4.1.3.4 本事業への関わりと効果の関係.....	49
4.2. オンラインでの対話に関する調査.....	51
4.2.1. 概要および方法.....	51
5. 成果・課題のまとめ.....	53
5.1 本事業を通じた示唆.....	53
5.2 . 今後の高校教育改革への展望.....	54

1. 概要

1.1. 背景と目的

高等学校は、進学率が約99%に達し、今日では中学校を卒業したほぼ全ての生徒が進学する教育機関となっている。高等学校には多様な背景を持つ生徒が在籍していることから、義務教育段階において育成された資質・能力を更に発展させながら、生徒の多様な能力・適性、興味・関心等に応じた学びを実現することが必要である。しかし、現状では、学校の立地、リソース等に伴う制約により、学校が生徒の多様な学習ニーズに対応しきれていない、若しくは潜在的なニーズを引き出せていないといった課題がある。

令和5年8月の高等学校教育の在り方ワーキンググループ中間まとめにおいては、こうした課題を解消するために、地理的状況や各学校・課程・学科の枠に関わらず、いずれの高等学校においても多様な学習ニーズに対応し、潜在的なニーズに応える柔軟で質の高い学びを実現し、全ての生徒の可能性を最大限引き出すことができるようにしていくべきであり、このための方策として、教科・科目充実型の遠隔授業や通信教育の活用、学校間連携等の促進等を一層進めていくことが重要とされている。

これらも踏まえ、小規模校の生徒等が、総合的な探究の時間等において、地域や学校を超えてつながり、同じ志を持っている同世代から学ぶといったことを可能とするプラットフォーム構築を行う。

1.2. 取り組みの概要

弊団体は、探究的な学びの機会を円滑に創出するため、日本各地の小規模校が接続する学校横断型ネットワーク（以下、本ネットワークという。）の構築を通じて、学校同士の垣根を超えて探究リソースを共有することを目指す。探究リソースとは、生徒が探究的な学びを深めるために必要となる、教員の知見、生徒の興味関心、教材および外部人材等であると定義する。

本ネットワークにおいて、探究リソースの共有を促すため、総合的な探究の時間等におけるオンライン合同授業、生徒の興味同士のマッチング、外部人材の活用ならびに教員勉強会等に取り組み、探究活動への影響や教員の意識変化等について効果検証を実施する。

さらに、将来的に本ネットワークが自走可能となるように、各年度において取り組み改善を構成校教員と行うとともに、オンライン連携の運営・継続ノウハウを明らかにする。

1.3. ネットワーク構成校

実施団体が募集を行い、教育課程内での連携（オンライン合同授業）の参加に承諾した学校を対象として設定した。本事業の趣旨をふまえ、地方に所在する小規模高校（1学年あたりおおむね3学級以下の規模の学校）を中心とした。

図表1-1 構成校一覧

種別	学校名（所在地）
公立・全日制	北海道池田高等学校／北海道鹿追高等学校／北海道えりも高等学校／青森県立三戸高等学校／岩手県立大槌高等学校／岩手県立住田高等学校／岩手県立前沢高等学校／宮城県中新田高校／山形県立新庄南高等学校金山校／山形県立小国高等学校／福島県立只見高等学校／茨城県立小瀬高等学校／新潟県立阿賀黎明高等学校／長野県阿南高等学校／長野県軽井沢高等学校／静岡県立松崎高等学校／静岡県立川根高等学校／静岡県立松崎高等学校／三重県立昂学園高等学校／京都府立須知高等学校／大阪府立豊中高等学校能勢分校／和歌山県立串本古座高等学校／鳥取県立青谷高等学校／島根県立吉賀高等学校／島根県立江津高等学校／島根県立浜田商業高等学校／徳島県立那賀高等学校／長崎県立宇久高等学校／長崎県立松浦高等学校／長崎県立猶興館高等学校／長崎県立五島南高等学校／熊本県立小国高等学校／宮城県立福島高等学校／鹿児島県立沖永良部高等学校
私立・全日制	五所川原第一高等学校 ※所在地：青森県 岩手女子高等学校 ※所在地：岩手県 片山学園高等学校 ※所在地：富山県 中村高等学校 ※所在地：東京都
私立・通信制	第一学院高等学校横浜キャンパス

【構成校における本取り組みの位置づけ】

- ・教育課程内における連携では、総合的な探究の時間を活用する
- ・構成校における探究活動は各校で設定するカリキュラムをベースに進める。本連携は、各校の探究活動を充実させる外部連携機会として位置付ける

【構成校における探究活動の特徴】

- ・生徒が自由にテーマを設定し、個人またはグループで探究活動に取り組む
- ・構成校間における探究活動の年間計画や指導方針、最終成果物は統一していない

運営指導委員会について

本事業では運営指導委員会を設置し、年2回有識者からの指導・助言を受けた。委員会では、本事業の実施状況や課題、今後の展望について検討を行った。

図表1-2 運営指導委員

役職	氏名（敬称略）
大阪教育大学 教授	田村 知子
東北学院大学 教授	稲垣 忠
一般社団法人Glocal Academy 代表理事	岡本 尚也
岩手県立大槌高等学校 校長	志田 敬
島根大学 准教授	中村 怜詞
信州大学 名誉教授	東原 義訓

図表1-3 令和6年度運営指導委員会実施日程

役職	実施日	議題
第1回	令和7年9月30日 (オンライン)	・令和7年度実施計画について ・事業の進捗状況・課題について
第2回	令和8年2月24日 (オンライン)	・令和7年度実施計画について ・事業の進捗状況・課題について ・事業報告および今後の方針について

2. 令和7年度実施事項

2.1. 探究的な学びを行う学校間のネットワーク構築

複数校オンライン連携により、多様な探究リソースを共有する仕組みの構築

オンラインネットワークによる探究資源の共有というコンセプトを令和6年度から引き継ぎ、これらの探究リソースの共有を活性化する方策を検証していく

◆ネットワークを通じて共有する探究リソース

① 生徒の多様な興味関心

- ・多様な関心を持つ他地域の高校生の存在は、本ネットワーク構成校の生徒にとって探究活動の意欲を高め、活動を深めていくための重要な資源となる。
- ・教育課程内外での各種オンライン交流活動、生徒の興味関心をマッチングする仕組みの構築を通じて、各校の生徒の探究活動を深めやすくする環境整備を行う。

② 多様な専門性を持つ社会人・学生サポーター

- ・過去に探究活動を実施した経験のある、専門性を持った大学生・大学院生および社会人をサポーター(外部人材)として本ネットワークに接続する。

2.2. 学校間での探究的な学びの機会の構築・実施

(1) 学校間での探究的な学びの機会の構築・実施

【A：教育課程内】

①1人1台端末を活用し、多様性があるテーマと繋がる「オンライン合同授業」

- ・複数の地域にまたがる構成校3～5校程度を一単位とし、全生徒対象のオンライン合同授業を年3回実施する(各2コマ)。

【令和7年度のポイント】

- ・合同授業の内容を、探究における問いの見直しや具体的アイデアの獲得に至るようなプログラムへ一部変更する
- ・合同授業で得られた気づきやアイデアの活用につながるフォローアップの実施(他校生徒やサポーターからのフィードバックの可視化・オンライン協働ツールを活用し、相互コメントをログとして共有する等)。合同授業をきっかけに非同期による連携事例をつくる
- ・連携グループの固定化を試験的に実施する

【B：教育課程外】

①探究テーマが共通する生徒同士の個別マッチング・意見交換

- ・類似した探究テーマをもつ生徒同士を合同授業外でマッチングし、お互いの探究活動に対する意見交換を通して探究活動を相互に深めるための仕組みづくりを行う。

【令和7年度のポイント】

- ・生徒の探究活動のステータスを定期的に把握するアンケート調査を実施し、マッチングの提案を行う
- ・生徒の探究活動のステータスを定期的に把握するアンケート調査を実施し、各校にフィードバックすることでニーズの可視化と共有をはかる
- ・生徒の協働的探究について関心がある学校に働きかけ、特定生徒の継続的連携を試行する

(2) プラットフォーム構築に向けた取組

ポータルサイト等を活用したプラットフォーム構築

多機能クラウドツール「Notion」により構成校教員用のポータルサイトを構築し、以下の項目について蓄積・共有をはかる。

① 探究リソース共有の仕組み構築

◆生徒の興味関心（探究テーマ）データベースの構築と個別マッチング

- ・生徒の探究テーマとその進捗状況を集約し、一覧化する。情報の集約にあたっては、生徒が回答可能なオンラインフォームにより行う。
- ・データベースはアクセス権限を限定した上で、構成校の教員に共有し、興味関心が近い生徒同士の個別交流希望を学校から受け付けることができるようにする。
- ・関心が近い生徒は継続的な連携を行い、定期的に活動の相互共有もしくは共同探究の立ち上げを支援する。

◆サポーター人材バンクの構築

- ・合同授業に参加したサポーターには、同意のもとでポータルサイトにプロフィール情報（有する専門性・探究伴走の経験等）を掲載し、生徒もしくは教員から、任意のタイミングでヒアリングやフィードバックの依頼をすることができるようにする。

【令和7年度のポイント】

- ・探究活動を支援している教員と外部サポーターを繋ぎ、教員が特定のテーマでサポーターから情報を得ることができる機会を設定する
- ・登録されているサポーターのプロフィールや追加情報について共有する機会を拡充する

② 構成校教員コミュニティの構築

◆教員向け探究勉強会

- ・構成校教員へ探究活動支援における課題意識についてヒアリングを行い、複数校が共有して持つ悩みや関心の高いトピックを抽出し、該当テーマを取り扱うオンライン研修会を開催する。
- テーマ例：探究活動の問いの立て方、探究活動支援における教員の関わり方 等
- ・上記に加えて、教員みずからが提案者となる探究支援の勉強会の開催を支援する。

③ 自走可能なポイントの検証

◆自走すべき内容と体制の検証（継続）

本ネットワークの機能開発を進めながら、事業終了後に継続すべきポイントと体制について、構成校のニーズをもとに引き続き考察する。継続すべきプログラムの仮説をもとに、自走の体制について複数のパターンを設定する。

3. 実施経過

3.1. 学校間での探究的な学びの機会の構築・実施

①オンライン合同授業

教育課程内で複数の地域にまたがる構成校3～5校をオンラインで繋ぎ、グループにわかれて探究活動に関する発表や交流を行った。

◆令和7年度実施内容：

図表3-1

	テーマ	時期	概要
第1回	探究テーマ共有会	6～7月	<ul style="list-style-type: none"> ・他校生徒との最初の出会いの場として、司会生徒を中心に自己紹介や興味関心に基づく交流活動を行う。 ・オンラインコミュニケーションにおける基本的な作法を身につけるとともに、他校生徒との対話を通じて今後の探究活動を前に進めるためのヒントを得る機会とする。
第2回	探究ブラッシュアップ交流会	10～11月	<ul style="list-style-type: none"> ・関心テーマや進捗状況が近い生徒同士で、探究活動に関する現時点での成果や悩みを共有し、議論を行う。 ・事前研修を受講した大学生・社会人のサポーターが各グループに参加し、活動のサポートを担う。
第3回	探究合同発表会	1～2月	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間の探究活動の過程や成果を発表するとともに、そこから得た学びを共有する。他校生徒やサポーターからのフィードバックを次年度への活動へと繋げる。

◆使用ツール：オンライン会議ツール「Zoom」・オンライン掲示板「Padlet」

■ 第1回 探究テーマ共有会（6～7月）

図表3-2 日程および参加校

	日程		参加校
A	6月11日	水	五所川原第一高等学校、山形県立小国高等学校 茨城県立小瀬高等学校、島根県立吉賀高等学校 徳島県立那賀高等学校
B	6月13日	金	新潟県立阿賀黎明高等学校、長野県軽井沢高等学校 静岡県立松崎高等学校、京都府立須知高等学校
C	6月17日	火	福島県立只見高等学校、和歌山県立串本古座高等学校 中村中学校・高等学校、島根県立浜田商業高等学校
D	6月23日	月	山形県立新庄南高等学校金山校、岩手県前沢高等学校（1年） 岩手女子高等学校（1年）、長崎県立宇久高等学校
E	6月25日	水	北海道池田高等学校、青森県立三戸高等学校 長崎県立猶興館高等学校、第一学院高等学校横浜キャンパス
F	6月26日	木	岩手県立大槌高等学校、宮城県中新田高等学校 静岡県立川根高等学校
G	6月27日	金	岩手県立住田高等学校、岩手県立前沢高等学校（2年）

			長野県阿南高等学校、大阪府立豊中高等学校能勢分校 島根県立江津高等学校
H	7月8日	火	片山学園高等学校、三重県立昴学園高等学校 鳥取県立青谷高等学校、鹿児島県立沖永良部高等学校
I	7月10日	木	北海道えりも高等学校、北海道鹿追高等学校 岩手女子高等学校（2年）、長崎県立五島南高等学校

図表3-3 タイムテーブルおよび進行役割

開始	終了	所要	内容	部屋	進行
13:30	13:40	0:10	順次入室・待機		
13:40	13:45	0:05	【はじめの挨拶と本時の目的】	メインセッション	カタリバ
13:45	13:50	0:05	【各校紹介】	メインセッション	カタリバ
13:50	13:55	0:05	【オンラインコミュニケーションの作法】	メインセッション	カタリバ
13:55	14:20	0:25	【ブレイクアウトルーム①】 ・4～5人のグループにわかれ、司会生徒の進行で交流する	ブレイクアウトルーム	司会担当生徒 (見回り・トラブル対応：運営スタッフ)
14:20	14:25	0:05	【移動タイム】	メインセッション	カタリバ
14:25	14:50	0:25	【ブレイクアウトルーム②】 ・4～5人のグループにわかれ、司会生徒の進行で交流する	ブレイクアウトルーム	司会担当生徒 (見回り・トラブル対応：運営スタッフ)
14:50	15:00	0:10	【感想共有】	メインセッション	カタリバ
15:00	15:05	0:05	【本事業の紹介】	メインセッション	カタリバ
15:05	15:10	0:05	【終わりの挨拶と写真撮影】	メインセッション	カタリバ
15:10	15:20	0:10	事後アンケート記入・順次退室		

■ 第2回 探究ブラッシュアップ交流会（10～11月）

・類似したテーマに取り組む複数校の生徒で構成された少人数（4～5発表単位）のグループの中で、各自の探究活動の進捗状況を共有し意見交換を行った。

・事前に研修を受講したサポーターが各グループに参加し、活動のファシリテーションを行った。多様な角度から意見を出し合うことで、新たな視点の獲得に繋げることを目指す。

図表3-4 日程および参加校

日程	学校
A 10月7日（火）	岩手県前沢高等学校(1年)、山形県立新庄南高等学校金山校 中村中学校・高等学校、鳥取県立青谷高等学校、福島県立只見高等学校
B 10月9日（木）	青森県立三戸高等学校、岩手県立大槌高等学校 静岡県立川根高等学校、三重県立昴学園高等学校

C	10月14日（火）	北海道鹿追高等学校、長崎県立松浦高等学校 長崎県立猶興館高等学校
D	10月17日（金）	新潟県立阿賀黎明高等学校、静岡県立松崎高等学校 京都府立須知高等学校
E	10月27日（月）	岩手県前沢高等学校(2年)、岩手女子高等学校(2年) 島根県立浜田商業高等学校
F	10月29日（水）	北海道池田高等学校、長野県軽井沢高等学校、片山学園高等学校 鹿児島県立沖永良部高等学校、長崎県立宇久高等学校
G	10月30日（木）	岩手女子高等学校(1年)、宮城県中新田高等学校 島根県立江津高等学校、長崎県立五島南高等学校
H	11月5日（水）	五所川原第一高等学校、山形県立小国高等学校、茨城県立小瀬高等学校 島根県立吉賀高等学校、徳島県立那賀高等学校
I	11月7日（金）	岩手県立住田高等学校、長野県阿南高等学校 大阪府立豊中高等学校能勢分校、熊本県立小国高等学校 宮崎県立福島高等学校、第一学院高等学校横浜キャンパス

図表3-5 タイムテーブル

開始	終了	所要	内容	部屋	進行
13:30	13:35	0:05	順次入室・待機		
13:35	13:50	0:15	イントロダクション ・本時の目的と流れ ・参加校紹介・最近のニュース	メインセッション	カタリバ
13:50	15:00	1:10	ブレイクアウトルームでの交流活動 ・接続確認およびアイスブレイク ・自己紹介（1人30秒程度） ・探究活動発表（1人3分程度） 質疑応答・ディスカッション（1人12分程度） ・感想共有・フリートーク（時間が余れば）	ブレイクアウトルーム	司会生徒 （サポーターが補佐）
15:00	15:10	0:10	Padletへのリフレクション投稿 ・今日見つけた探究活動を前に進めるヒント	メインセッション	カタリバ
15:10	15:15	0:05	クロージング ・学校横断型探究プロジェクトの紹介 ・事務局からのお知らせ	メインセッション	カタリバ
15:15	15:20	0:05	事後アンケート記入・順次退室	メインセッション	

■ 第3回 探究合同発表会（1～2月）

- ・1年間の探究活動の過程や成果を発表するとともに、得た学びを共有した。グループ内でのディスカッションを通して、自らの活動を改めて振り返り、新しい気づきを得ることを目指す。
- ・事前に研修を受講したサポーターや構成校教員が各グループに参加し、司会生徒のサポートを行った。多様な角度から意見を出し合うことで、新たな視点の獲得に繋げることを目指す。

図表3-6 日程および参加校

日程		学校
A	1月26日（月）	北海道鹿追高等学校、鹿児島県立沖永良部高等学校 山形県立新庄南高等学校金山校
B	1月28日（水）	五所川原第一高等学校、山形県立小国高等学校、茨城県立小瀬高等学校 島根県立吉賀高等学校、徳島県立那賀高等学校
C	1月29日（木）	岩手県立大槌高等学校、長崎県立宇久高等学校 青森県立三戸高等学校
D	1月30日（金）	大阪府立豊中高等学校能勢分校、宮城県立福島高等学校 片山学園高等学校、岩手県前沢高等学校（2年）
E	2月3日（火）	北海道池田高等学校、岩手女子高等学校（1年） 和歌山県立串本古座高等学校
F	2月16日（月）	島根県立浜田商業高等学校、岩手県前沢高等学校（1年） 島根県立江津高等学校
G	2月19日（木）	福島県立只見高等学校、宮城県中新田高等学校 静岡県立川根高等学校
H	2月20日（金）	新潟県立阿賀黎明高等学校、静岡県立松崎高等学校 京都府立須知高等学校
I	2月24日（火）	長崎県立松浦高等学校、中村中学校・高等学校 岩手県立住田高等学校、
J	2月26日（木）	三重県立昴学園高等学校、長崎県立五島南高等学校 岩手女子高等学校（2年）

図表3-7 タイムテーブル

開始	終了	所要	内容	部屋	進行
13:30	13:35	0:05	順次入室・待機		
13:35	13:50	0:15	イントロダクション ・本時の目的と流れ ・参加校紹介・最近のニュース	メインセッ ション	
13:50	15:00	1:10	ブレイクアウトルームでの交流活動 ・接続確認およびアイスブレイク ・自己紹介（1人30秒程度） ・探究活動発表（1人5分程度） 質疑応答・ディスカッション（1人10分程度） ・感想共有・フリートーク（時間が余れば）	ブレイクア ウトルーム	司会生徒 （サポーター が補佐）
15:00	15:10	0:10	Padletへのリフレクション投稿 ・今日見つけた探究活動を前に進めるヒント	メインセッ ション	カタリバ
15:10	15:15	0:05	クロージング ・学校横断型探究プロジェクトの紹介 ・事務局からのお知らせ	メインセッ ション	カタリバ
15:15	15:20	0:05	事後アンケート記入・順次退室	メインセッ ション	

図表3-8 合同授業の準備の流れ

日時	事務局の実施事項	学校の実施事項
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 窓口教員対象新年度面談 ・ 一般教員対象プロジェクト説明会 ・ 第1回合同授業日程調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回合同授業日程調整（時間割変更等）
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事前接続テスト ・ 第1回合同授業タイムライン作成 ・ 第1回合同授業打ち合わせ会実施 ・ 第1回合同授司会生徒ミーティング実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回合同授業打ち合わせ参加 ・ 第1回合同授業生徒への事前指導（発表資料制作等）
6月	オンライン合同授業第1回	
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回合同授業振り返り会実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回合同授業振り返り会参加
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回合同授業日程調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回合同授業日程調整（時間割変更等）
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回合同授業タイムライン作成 ・ 第2回合同授業打ち合わせ会実施 ・ 第2回合同授司会生徒ミーティング実施 ・ サポーターへの事前研修（オンライン） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回合同授業打ち合わせ参加 ・ 第2回合同授業生徒への事前指導（発表資料制作等）
10月	オンライン合同授業第2回	
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回合同授業振り返り会実施 ・ 第3回合同授業日程調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回合同授業振り返り会参加 ・ 第3回合同授業日程調整（時間割変更等）
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第3回合同授業タイムライン作成 ・ 第3回合同授業打ち合わせ会実施 ・ 第3回合同授司会生徒ミーティング実施 ・ サポーターへの事前研修（オンライン） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第3回合同授業打ち合わせ参加 ・ 第3回合同授業生徒への事前指導（発表資料制作等）
1月	オンライン合同授業第3回	
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第3回合同授業振り返り会実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回合同授業振り返り会参加
3月		

令和7年度の新規実施事項

令和6年度の実践においては、下記のような課題が生まれた。

- 年3回という現在の実施形態では、オンライン合同授業が非日常的な単発イベントとなってしまう、探究活動の中長期的な質向上に寄与することが難しい
- オンライン合同授業内のグループ活動において、ファシリテーションを担う大学生・社会人の外部サポーターが対話を主導する場面が多くみられ、生徒同士の主体的な対話を引き出すことが難しい
上記を踏まえ、令和7年度は以下の取り組みを新たに実施した。

①授業後のリフレクションの充実と伴走への接続

- 交流後にオンライン掲示板Padletへ「今日みつけたヒント」を投稿させ、学びの言語化および相互参照を促した。
- あわせて「今日の活動を踏まえたネクストアクション」を投稿させ、これを担当教員に共有することで、各校での伴走指導に活用できるようにした。



図表3-9 Padletの書き込みの様子

②目的意識の事前共有

- 各校教員に向け、事前に本授業において「達成しておいてほしい状態」「意識してほしい態度」を周知し、生徒への共有を依頼した（自分の言葉で語る／違いを楽しむ／新しい発見を大切にす）。加えて事前に各校へオンライン合同授業の活用方法をまとめた「オンライン合同授業活用ガイド」を配付し、生徒一人ひとりが各自の探究活動進捗状況に応じて、明確な目的意識をもった状態で当日の交流活動に参加できるようにした。

オンライン合同授業 活用ガイド

氏名: _____

今回のオンライン合同授業では、
自分の活動について発表、その後みんなでディスカッションを行います。
ふだん出会うことのない他地域の高校生とつながることで、自分の探究活動に関する新しいヒントがもらえる絶好の機会！
みんなはどんなヒントを持ち帰りたい？事前に当日の目的を設定し、準備しておこう！

▼特に当日意識したいポイントに○をつけて(いくつでもOK!)、事前に()の中を埋めておこう！

特に意識したいポイントに○	こんな人におすすめ！ あくまで一例です	合同授業でできること
🚀	アクション進行中	現在構想中の探究アイデアを共有して、改善や発展のヒントをもらう →特に意見がほしい部分は？()
🌱	テーマ設定中&悩命中	現在行き詰っていることや悩んでいることを相談して、解決のためのアイデアをもらう →何を相談する？()
🌱	テーマ設定中&悩命中	自分の関心テーマや問いについて、他地域の状況や同世代の意見をヒアリングする →何をヒアリングする？()
🌱	テーマ設定中&悩命中	他の人の発表を聞きながら、自分の探究活動の参考になりそうな視点や方法を探す →どんな部分を参考にしたい？()
🚀	アクション進行中 🌱	その他、自分なりの目的がある人はこちらの欄に書いておこう！

※「特に意見がほしい部分」や「相談内容」「ヒアリング内容」については、当日の発表用スライドにも書いておきましょう！
(4ページ目の発表事前準備シートを使用する人は「🌱【ディスカッションタイム用】」の部分をしっかり埋めておこう)

図表3-10 オンライン合同授業活用ガイド

③交流活動の進行を生徒へ移行

- 令和6年度まで外部サポーターが担っていたグループ活動の司会進行およびファシリテーションを、事前選出された生徒にゆだねる形へと変更した。
- その準備として、放課後の時間帯に司会生徒対象の事前ミーティングを開催し、役割や進行上の留意点を確認するとともに、ファシリテーションの基礎（安心感を生み出す／意見を引き出す／対話を進める）を身につける研修を実施した。
- また、司会生徒にオンライン掲示板Padletへ自校の「学校自慢」投稿を依頼し、交流に向けた話題づくりを行った。

○司会生徒ミーティング内容：

- ・第1回目テーマ「『ファシリテーション』入門」

図表3-11

所要時間	内容	ルーム
0:05	Zoom入室	メインセッション
0:10	当日の流れと司会の役割について説明	メインセッション
0:05	トラブル時の対応方法	メインセッション
0:10	ファシリテーション入門（司会者3つの役割） ①安心感を生み出す ②意見を引き出す ③対話を進める	メインセッション
0:20	実践・対話ワーク ・簡単なテーマで司会進行をしてみる ・授業時のケーススタディのディスカッション	ブレイクアウト
0:10	Padlet投稿依頼、横断探究PG紹介 クロージング	メインセッション

- ・第2回目テーマ「『アクティブリスナー』になろう！」

図表3-12

所要時間	内容	ルーム
0:05	Zoom入室	メインセッション
0:15	導入（学校横断型探究プロジェクト／第2回合同授業について） 当日の流れ、トラブル対応についての説明	メインセッション
0:10	アクティブリスナーになろう！ ○アクティブリスナーになるための3つのポイント ・うなずき・表情 ・言い換え・共感 ・積極的な質問	メインセッション
0:20	実践ワーク ・順番に「自分の探究活動について」共有 ・発表者に対して質問、共通点を見つけてフリートーク	ブレイクアウト
0:10	Padlet投稿依頼、学校横断型探究プロジェクトの他取り組みの紹介 クロージング	メインセッション

・第3回目テーマ「対話を広げる質問力を身につけよう！」

図表3-13

所要時間	内容	ルーム
0:05	Zoom入室	メインセッション
0:10	・アイスブレイク（チャット・リアクション） ・会の導入（趣旨説明・流れの確認） ・交流TIME①の説明	メインセッション
0:07	対話ワーク①（アイスブレイク：自己紹介+協力して会話を続ける）	ブレイクアウト
0:15	対話を広げる質問力を実践しよう！ ・クローズドクエスチョンとオープンクエスチョン ・オープンクエスチョンの活用 ①探究活動の中身を詳しく聞いてみる ②発表者の気持ち・思いを詳しく聞いてみる ③メンバーみんなで共感/学びポイントを見つける	メインセッション
0:12	対話ワーク② 発表の良い点を見つけるワーク	ブレイクアウト
0:11	学校横断型探究プロジェクトについて 第3回オンライン合同授業について Padletのお願い、クロージング	メインセッション

図表3-14 司会生徒マニュアル（一部抜粋）

🎯 今回の授業で目指すこと

- 参加者一人ひとりが、現在取り組んでいる探究活動について自分の言葉で説明すること
- グループメンバーとの対話を通して、探究活動を前に進めるヒントを持ち帰ること

👤 みなさんの役割

- 各グループに1人ずつ配置される大人の「サポーター」とともに、複数の学校が混じったグループの交流活動の司会進行をします

😊 よりよい交流のために

- 交流する相手の名前は、相手のがぞむ呼び方で呼びましょう
- 交流する相手の意見や想いを尊重しましょう
- 交流中の乱暴な発言やふざけた態度は控えましょう
- 交流中に相手に無理強い（連絡先等の交換など）をしないようにしましょう
- 交流中の写真や動画を許可なく撮ったり、SNS等へアップロードしないようにしましょう

📌 その他、司会進行では以下も意識してみよう！

- 誰かが発言しているときは、笑顔やうなづきを意識しよう（リアクションボタンも◎）
- 誰かが発表した後は、毎回「拍手」で！（他のメンバーにも拍手をうながしてみよう！）
- 全員の発表がおわったら、時間を目一杯つかってフリートークしよう

⚠️ こまったときの対処法

- 基本的には、状況に応じて各ルームにいる大人のサポーターに助けを求めましょう！
- また、以下も参考にしてください。

▶自分がZoomから抜けてしまったり、画面が固まってしまったとき

- 一旦再起動して入りなおす
- 難しければ、教室の先生に報告し、予備端末と交換してもらおうなどしてすみやかにルームに戻る（同じ学校の生徒が同じグループにいる場合は、その生徒の端末から参加してもよい）

▶他の生徒のマイクがONにならないとき

- 一旦教室の先生に相談するよう声をかけ、一旦順番を飛ばして交流を続行する

▶他の生徒のカメラがONにならないとき

- マイクONにして声を出せるか確認し、声が出せるようならそのままカメラなしで続行する
- 声も出せないようならチャットかリアクションボタンで反応を求め、一旦順番を飛ばして交流を続行する

2. プログラム評価

各回の授業後に、参加生徒に対してプログラム評価に関するアンケートを実施した。

図表3-15 各回事後アンケートにおけるオンライン合同授業に対する所感抜粋（生徒）

4 とても思う ～ 1 全くそう思わない の4件法

4 とてもよかった ～ 1 全くよくなかった の4件法（項目10のみ）

No	アンケート項目	第1回(6月) n=914		第2回(10月) n=805		第3回(2月) n=703	
		項目平均	肯定的回答率	項目平均	肯定的回答率	項目平均	肯定的回答率
1	授業全体を通して、他校生徒との交流を楽しむことができた。	3.47	91.97%	3.55	94.29%	3.47	94.31%
2	授業全体を通して、自分の考えや気持ちを他校生徒に伝えることができた。	3.37	89.99%	3.50	93.66%	3.40	92.89%
3	授業全体を通して、相手の発言に関心を持ち、質問や感想を伝えることができた。	3.38	89.77%	3.47	92.92%	-	-
4	自分の興味関心や探究テーマを自分の言葉で説明することができた。※1	3.41	91.86%	3.43	91.30%	3.43	93.17%
5	自分の興味関心や探究テーマに自信を持つことができた。※2	3.25	85.15%	3.39	90.56%	3.30	89.05%
6	自分の興味関心や探究テーマについて新たな視点やアイデアをもらうことができた。	3.21	82.18%	3.46	91.55%	-	-
7	今後の探究活動や自分の将来／進路について、他校生徒から新たな視点やアイデアをもらうことができた。	-	-	-	-	3.32	88.19%
8	今後の探究活動や自分の将来／進路について、大人のサポーターから新たな視点やアイデアをもらうことができた。	-	-	-	-	3.48	93.03%
9	他地域の高校生との交流に、もっと取り組んでみたいと思った。	3.24	83.61%	3.29	85.71%	-	-
10	今回のオンライン合同授業全体について、あてはまるものを選んでください。	3.40	91.09%	3.50	94.16%	3.44	93.31%

※1 第3回は「これまで取り組んできた探究活動について自分の言葉で説明することができた。」とした。

※2 第3回は「これまで取り組んできた探究活動に自信を持つことができた。」とした。

令和7年度は、上述の通り本プログラムを生徒の探究活動への質向上に直接的に繋がる活動とするべく、ブレイクアウトルームでの交流後すぐに「新たに発見したこと」や「今後に向けてのアクション」を含む振り返り及び共有を行う時間を設けたり、後日その回答を窓口教員へ共有し伴走支援のツールとして活用いただくよう呼びかけたりといった工夫を加えてきた。下記に示す通り、令和7年度はオンライン合同授業をきっかけに自身の探究活動を何らかの形で見直したと回答した生徒が各項目で約半数に上ったが、こうした工夫が一定程度寄与している可能性がある。

図表3-16 各回事前アンケートにおける前回のオンライン合同授業を踏まえたその後の活動の振り返り
4 とてもそう思う ～ 1 全くそう思わない の4件法

	第2回事前アンケート結果 (第1回オンライン合同授業後の 探究活動の変化)		第3回事前アンケート結果 (第2回オンライン合同授業の探 究活動の変化)	
	項目平均	肯定的回答率	項目平均	肯定的回答率
前回のオンライン合同授業をきっかけに、自分の探究活動のテーマを見直した	2.55	48.2%	2.55	50.5%
前回のオンライン合同授業をきっかけに、自分の探究活動の情報収集の方法を増やしたり、見直したりした	2.58	51.0%	2.62	54.0%
前回のオンライン合同授業をきっかけに、自分の探究活動の分析の観点を増やしたり、見直したりした	2.55	48.4%	2.63	52.1%

図表3-17 「具体的にどのような変化があったのかを教えてください」
(第2回事前アンケート自由記述回答抜粋)

<p>テーマを見直した例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 他校の生徒の意見を聞くことでテーマを見直すことができ、テーマを変えた。 ● 自分のテーマを見直し、本当に自分の探究として活動できるのかを改めて考えられた。 ● 自分のテーマがとても壮大だと思ったのでテーマを絞れるまで絞った。 ● 大幅にテーマの変更を考えた。もっと自分が関心のあるものをテーマにしたいと思った。 ● テーマが変わった訳じゃないけど、テーマについて見直すことが出来た。テーマの内容を少し変えた。 ● 自分の活動で今の時点で何か地域に影響を与えているかなど考えるようになった。地域活性化の分野で他にできることは何か考えた。 ● 考えやすい、進めやすいなどこれからの進捗も踏まえて想像しやすい内容にした。 ● 何を目的として探究をするのかを考え直せた。 <p>情報収集の方法を増やしたり、見直したりした例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ● オンライン探究以前は、全て自分で進めて、パニックになっていたが、オンライン探究を通して、もっと人に頼ろうと思い、先生や大学生と協力して、計画的に進めることが出来た。 ● 調べなければいけないことがいくつもあったからそれに気づくことができた。 ● 探究テーマがキャンプなので、キャンプを知っている人など、インターネットで調べるだけでなく、キャンプに少しでも触れたことのある人に、聞いてアドバイスやヒントをもらうことができた。また、他の県や町などでも同じようなことをしてるかなどを調べ、どのようなことをしたのかなどを調べました。 ● 先行事例を調べるといい。とアドバイスをもらったため、商品開発やブランド化に成功した例を調査した。 ● また新たに調べたらいいことやそれを行うに当たってどういう事例があるかなど調べなきゃいけないことがわかった。 ● 前回の交流を通して、すでにアクションを起こしている方のお話を聞いて、自分も積極的に行動を起こそうと背中を押していただきました。そのおかげもあって、自分の探究活動の情報収集の仕方を見直すきっかけにつなげることができました。 ● インターネットの中でも偏っていたため、その情報が正しいのかを論文なども見て判断するようになった。

分析の観点を増やしたり、見直したりした例：

- 他校の人の話を聞いて、観点を自分たち中心で考えていたが狩猟によって駆除される害獣や農家に携わる方々の観点を増やした。
- 私は、地元の廃棄される果物や野菜を使った商品開発を行っていましたが、地元の特産品で商品開発をしている他の学校の生徒の意見を聞き、特産品で商品開発をするのも良いなど思い商品開発に使う食材の中にりんごなどを候補として入れたりしました。
- 自分とは少し違った視点で食事について調べてる人もいて、自分のと組み合わせたり、取り入れたり出来そうだなと思ったりした。

■ 固定グループの設定および非同期連携の検証

令和7年度は、構成校の教員および生徒の中長期的な関係構築を目的とし、全3回の合同授業を同一の構成校同士で実施する「固定グループ」を一部設定した。構成校担当教員に向けて実施した年度当初のアンケートにおいて「年間を通じて同じ学校同士での交流を希望する」と回答した学校を中心に選出し、第2回および第3回オンライン合同授業においては、欠席者の発生等による調整を除き、基本的に同一メンバーでのブレイクアウトルーム交流ができるよう配慮した。

図表3-18 オンライン合同授業における固定グループ

グループ①	五所川原第一高等学校、山形県立小国高等学校 茨城県立小瀬高等学校、島根県立吉賀高等学校、徳島県立那賀高等学校
グループ②	新潟県立阿賀黎明高等学校、静岡県立松崎高等学校、京都府立須知高等学校

下記の通り、固定グループと全グループのプログラム評価に大きな差異は見られなかった。

図表3-19 第3回事後アンケートにおけるオンライン合同授業に対するプログラム評価平均比較

4 とてもそう思う ～ 1 全くそう思わない の4件法
4 とてもよかった ～ 1 全くよくなかった の4件法（項目7のみ）

No	アンケート項目	全グループ	固定グループ
1	授業全体を通して、他校生徒やサポーターとの交流を楽しむことができた。	3.47	3.50
2	授業全体を通して、自分の考えや気持ちを他校生徒やサポーターに伝えることができた。	3.40	3.43
3	これまで取り組んできた探究活動について自分の言葉で説明することができた。	3.43	3.45
4	これまで取り組んできた探究活動に自信を持つことができた。	3.30	3.30
5	今後の探究活動や自分の将来／進路について、他校生徒から新たな視点やアイデアをもらうことができた。	3.32	3.35
6	今後の探究活動や自分の将来／進路について、大人のサポーターから新たな視点やアイデアをもらうことができた。	3.48	3.55
7	今回のオンライン合同授業全体について、あてはまるものを選んでください。	3.44	3.46

また、実証校生徒のうち3校にアンケートをとった結果（n=56）、以下の通りとなった。全体の3/4の生徒が同じメンバーとの交流を経験したが、合同授業について「毎回同じメンバーで交流したい」「毎回違うメンバーで交流したい」「どちらでもよい」と回答した生徒はほぼ同率であった。

図表3-20 質問①「今回交流したメンバーの中に、前回の合同授業で交流した他校生徒はいましたか」

いた	75.00%
いなかった	19.64%
わからない	5.36%

図表3-21 質問②-1「交流メンバーの組み合わせについて、意見を聞かせてください」

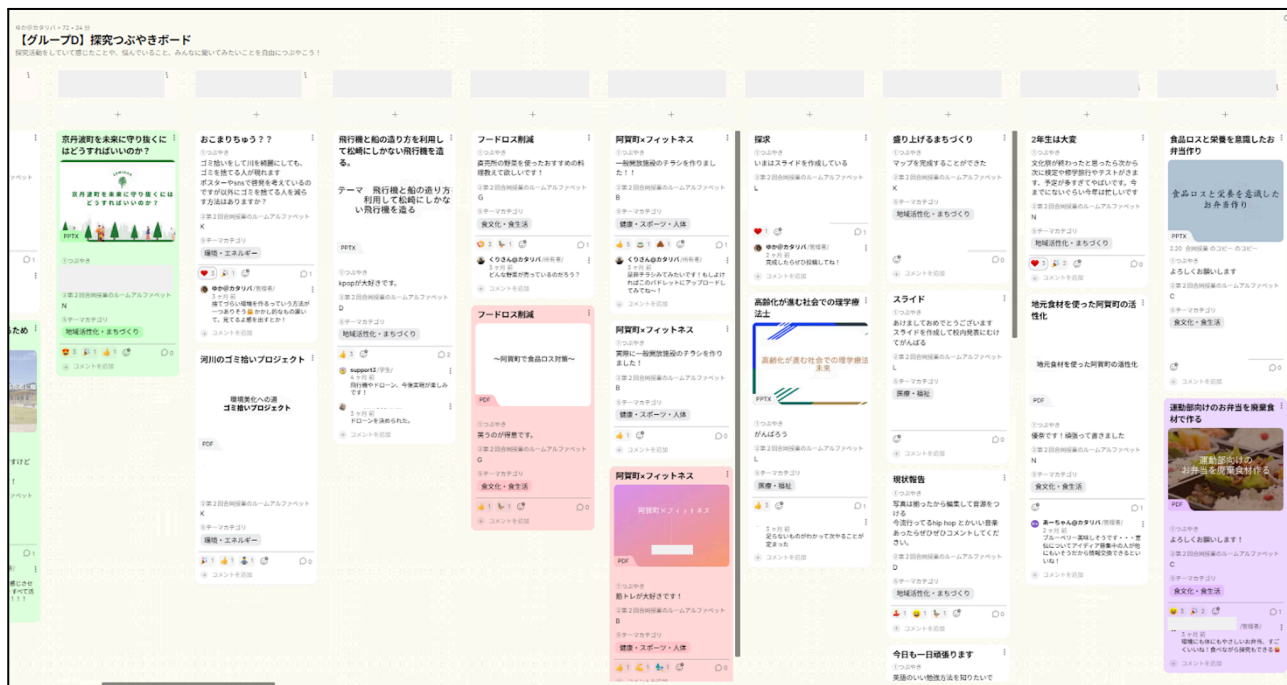
毎回同じメンバーで交流したい	32.14%
毎回違うメンバーで交流したい	33.93%
どちらでもよい	33.93%

図表3-22 質問②-2「上の質問のように答えた理由を教えてください」（自由記述抜粋 ※原文ママ）

毎回同じメンバーで交流したい	<ul style="list-style-type: none"> メンバーの成長を知れて、探究の進め方もお手本にしたりできる そのほうが毎回自分のプロジェクトの説明を細かくする手間が省けると、安心感があるため 話が通じやすい 内容がどう変化しているか分かるから 大体の内容は知っているから、一緒の方がしっかり理解できるから 誰がどんなプロジェクトをしているか分かるし、質問があった場合、質問しやすいからです 顔なじみの人がいると安心できるから
毎回違うメンバーで交流したい	<ul style="list-style-type: none"> たくさんの意見が欲しい 違う人が何やってるかも知りたい 新たな意見を貰えるかもしれないから おんなじメンバーだと緊張がほぐれてしまう より多くの人プロジェクトを見たり聞いたりしたい 他の県の人と関わる機会が少ないと思うのでこういった機会にたくさんの人と関わるのができたら良いと思ったから せっかく画面越しで会うんだから違う人と会ってみたい 様々な探究テーマだったり聞いてみたいから
どちらでもよい	<ul style="list-style-type: none"> 意見交換などコミュニケーションがしやすい。でも知らない人となら新しい意見が取り入れられる 同じメンバーなら成長したものをみたい、また違う人の意見も聞きたい 違う人に伝えて色々な意見をもらうのも同じ人に伝えて成長を見てもらうのもいいと思うから もっといろいろな人からも意見がもらえるし1度聞いているからこそきけることがあるから 誰と同じになっても同じように意見を伝えられる力が必要だと思うから 新しいメンバーと交流して新たな意見を取り入れたいなと思いましたが、同じメンバーのほうが緊張せずに発表できるかなと思ったからです

並行して、オンライン掲示板Padlet（「探究つばやきボード」）を用いた非同期での交流活動を実施した。第2回・第3回オンライン合同授業のそれぞれ1週間前を目安に当日の発表資料を事前投稿・確認するよう依頼した他、第2回オンライン合同授業終了後から第3回実施日まで、日々の探究活動内容や振り返り、現在の悩み等を、各校の「総合的な探究の時間」の中で定期的に投稿してもらい、互いにリアクションボタンやコメントを送信し合うよう促した。

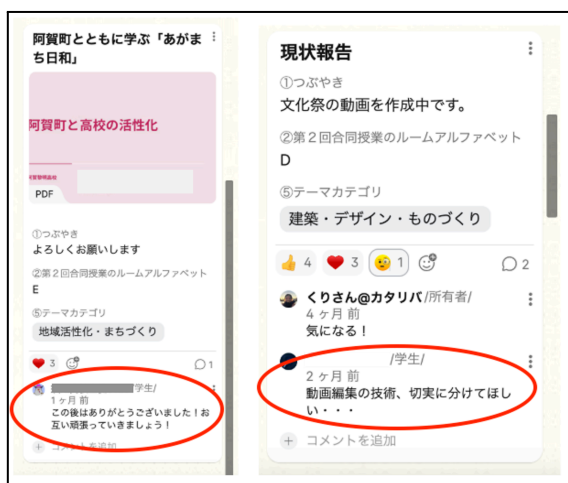
図表3-23 オンライン掲示板Padletでの非同期連携に使用した「探究つばやきボード」
生徒一人ずつに一行が割り当てられており、投稿を時系列で確認することができる構成になっている



「探究つばやきボード」における非同期でのやりとり例

図表3-24 左：合同授業にて交流した他校生徒の投稿にコメントを送っている様子

図表3-25 右：他校生徒から自身の探究活動に関する情報収集をしている様子



非同期での交流にあたっては、連携校教員より放課後や休み時間などの時間外に自主的な交流を促すことのハードルの高さを指摘されたことを踏まえ、通常の「総合的な探究の時間」の終わり5分程度を使用して、その日の振り返りを兼ねて近況を投稿する形式で運用を試みた。一部の学校では、生徒のリフレクションおよび活動のポートフォリオ作成の一環としても活用された。

第3回オンライン合同授業終了後、実証校のうち3校に対してアンケートを取った結果 (n=56)、掲示板の存在を認識し、実際に投稿や閲覧をしていた生徒は回答者の8割以上に上った一方、「気軽に投稿できた」「役立つと感じた」と回答する生徒は全体の45%程度にとどまった。途中で投稿数が減少する学校も見られた他、生徒間でのリアクションやコメントの送り合いはあまり継続せず、非同期交流の活性化には課題が残った。

図表3-26 質問①「あなたは、Padlet探究つばやきボードが存在することを知っていますか？ また、実際に投稿や閲覧をしましたか？ 最も近いものを選んでください。」

探究つばやきボードの存在を知っており、自分自身で投稿やリアクションもした	50.00%
探究つばやきボードの存在を知っており、閲覧（他の人の投稿を見た）だけはした	32.14%
Padlet探究つばやきボードの存在は知っていたが、投稿も閲覧もしていない	10.71%
Padlet探究つばやきボードが存在することを知らなかった	7.14%

図表3-27 質問②-1「あなたは、自分の探究の進捗やつばやきをどれくらいの気軽さで投稿できましたか？」

とても気軽に投稿できた	17.86%
気軽に投稿できた	33.93%
どちらでもない	17.86%
あまり気軽には投稿できなかった	17.86%
投稿しなかった	12.50%

図表3-28 質問②-2「上のように回答した理由を、具体的に教えてください」（自由記述抜粋 ※原文ママ）

とても気軽に投稿できた／ 気軽に投稿できた	<ul style="list-style-type: none"> ● 人数が多く見られてる感じはあまりないから ● 学校の授業の最後に必ず投稿するように言われていた ● みんなの意見を見ながら、投稿した ● みんなと共有するのが楽しかったから ● 今の気持ちとかみんな発信していて自分もしやすかったから ● 自分の探究のアンケートとか色々投稿できたから
あまり気軽には投稿できなかった／ 投稿しなかった	<ul style="list-style-type: none"> ● 書くことがなかった ● 何を投稿すればよいのかわからなかった ● 当時プロジェクトがあまり進んでいなかったもので、何を書けばいいかわかりませんでした ● 自分の投稿したものを多くの人に見られるのが少し恥ずかしいなと思った

図表3-29 質問③-1「あなたは、他の人の投稿を見て、自分の探究活動を進める上で役に立つと感じましたか？（ヒントになった、刺激になった等）」

とても役に立つと感じた	14.29%
役に立つと感じた	41.07%
どちらでもない	33.93%
あまり役に立つとは感じなかった	5.36%
全く役に立つとは感じなかった（または、閲覧しなかった）	5.36%

図表3-30 質問③-2「上のように回答した理由を具体的に教えてください」（自由記述抜粋 ※原文ママ）

とても役に立つと感じた／ 役に立つと感じた	<ul style="list-style-type: none"> ● 似たテーマの人の投稿を見て参考にしようと思ったから ● 似たような話があったから情報の集め方とかに役立った ● 他の人の考えを知れるから ● 動画の編集の仕方やどんな風に写真や動画をいれるかの選別方法 ● 自分と似たテーマの方は参考になった
--------------------------	--

	<ul style="list-style-type: none"> ● 自分と似たテーマの人を見つけ自分のテーマの参考になれば良いと思ったから ● 他の人が進行しているプロジェクトの進捗状況や、サポーターの方のコメントが役立ったと感じたから
あまり役に立つとは感じなかった／全く役に立つとは感じなかった	<ul style="list-style-type: none"> ● 閲覧しなかった ● 難しかった ● 見るのを忘れていた ● 自分の探究テーマに似た人の意見が聞けなかったから ● 自分の探究に近いものがなかった

今後は、投稿を促すだけでなく、自身の投稿と同じタイミングで必ず複数名に質問を投げかけるといったようなタスクの明確化や、似通ったテーマで探究を行う生徒同士が投稿を閲覧しやすくなるような導線づくり、非同期でのやりとりを次回のオンライン合同授業で活かす仕組みを作るなど、同期・非同期の活動をより密接に接続させる工夫が求められる。また、今回は事務局で行った掲示板の巡回や必要に応じたサポートの書き込みを連携校教員に一部担ってもらい、投稿が停滞している際に互いに声を掛け合えるような、学校間の連携体制構築も検討する必要がある。

またアンケートからは活用の阻害要因として、未完成なまま自身の探究活動を共有することへの抵抗感や、操作方法の煩雑さが抽出されているほか、面識の少ない他校生徒へコメントすることへの心理的ハードルが生じた可能性も示唆された。第1回のオンライン合同授業から、互いの興味関心や探究活動の発表を行うだけでなく、よりカジュアルなトピック等を通して関係性づくりを丁寧に行っていくことも必要である。また、テキストベースの交流だけでなく、写真や短い動画を活用して活動の様子を伝えやすくするなど、生徒がより直感的に、楽しみながら継続できる運用も求められる。

■ 自走を見据えた新たな運営モデルの検証

第3回オンライン合同授業では、将来的な自走を見据えた新しい運営モデルの構築を行い、一部グループで検証を進めた。運営マニュアルを整備し、これまで事務局が担っていた運営業務の一部を連携校の教員もしくはコーディネーターにゆだねることで、連携校のより主体的な参加と持続可能な体制づくりを目指した。

図表3-31 新運営モデル検証グループ

2月19日（木）	福島県立只見高等学校、宮城県中新田高等学校、静岡県立川根高等学校
----------	----------------------------------

図表3-32 従来の運営モデルとの比較

	従来モデル	新モデル
交流グループの編成	事務局が担当し、各連携校に確認を依頼	連携校同士が各校の生徒情報を持ち寄り、協議の上決定
授業当日の欠席者発生時の最終調整	各連携校からの連絡を受けて事務局が実施	連携校が各自で調整
授業当日のメインルーム司会進行	事務局が担当	連携校教員もしくはコーディネーターが担当
授業当日のブレイクアウトルーム巡回 ＊生徒の参加確認やトラブルシューティング等	事務局が実施	事務局・連携教員もしくはコーディネーターが共同で実施
生徒配付用の当日ワークシート	各日程毎に事務局が作成	事務局が作成したひな形を各連携校がカスタマイズして使用

図表3-33 各参加校が参照可能な運営マニュアル

運営マニュアル	
1/9 顔合わせミーティング	
参加校情報の共有	「参加校情報」を参照し、各校の紹介を行います
実施要項の確認	「実施要項」を参照し、授業の概要を確認します
グループ編成枠の確認	「グループ編成枠」を参照し、各ブレイクアウトルームの生徒数および司会生徒の選出数を確認します
探究テーマの確認	「探究テーマ情報」を参照し、同一ルームにできそうな生徒の組み合わせを確認します
スケジュールの確認	「運営マニュアル（本シート）」を参照し、今後の動きの確認を行います
連絡手段の確認	Slackチャンネルの確認を行います
↓	
各校対応①（顔合わせミーティング～最終打ち合わせミーティングまで）	
グループ編成	「グループ編成シート」の該当欄に、自校生徒の氏名を記入します
司会生徒選出	「グループ編成シート」を参照しながら司会生徒を選出し、下記対応を行います ① 「グループ編成シート」の該当生徒の氏名の前に★をつける ② 該当生徒に「司会生徒マニュアル」を配布する ③ 該当生徒に「司会生徒事前ミーティング要項」を配布し、ミーティングへの参加もしくはアーカイブ視聴を促す ④ 該当生徒に授業当日までにPadlet「最近あった学校ニュース」を投稿するよう伝達する
↓	
2/4 最終打ち合わせミーティング	
申し送り事項の共有	一旦氏名が記入された「グループ編成シート」（※各校にて印刷推奨）を見ながら、下記を共有します 必要に応じて手元でメモをとっていただき、当日の最終グループ調整の際にご参照ください ※情報の取り扱いにはご注意ください ① オンライン上でのコミュニケーションに特に不安がある生徒 →コミュニケーションに不安がある生徒が特定のルームに固まらないよう、調整を行います ※サポーターに伝えておきたい事項がある場合は、事務局より伝達いたします ② その他、グループ編成をした際の問題点や気になった点 →調整および確認を行います
スケジュールの確認	「運営マニュアル（本シート）」を参照し、今後の動きの確認を行います
↓	

図表3-34 各参加校が入力するグループ編成シート

グループ編成シート【個人情報につき取り扱い注意（生徒共有はOKですが、印刷もしくはPDFに限りです）】													
▼事務局記入欄					▼参加校記入欄								
グループ (ルーム)	人数			グループテーマ <small>特に得意な科目・関心を持った生徒がいる場合、なるべく同じグループに配置します</small>	サポーター <small>詳しいプロフィールは サポーター欄に必ず記載ください</small>	司会担当校	生徒名入力欄 <small>司会生徒には★をおつけください。複数名で活動している生徒は、別グループに配置してください</small>						
	只見	中新田	川根				只見	只見	只見	中新田	中新田	中新田	川根
1	2	2	1			只見							
2	2	2	1			只見							
3	2	2	1			只見							
4	2	2	1			只見							
5	2	2	1			只見							
6	2	2	1			中新田							
7	2	2	1			中新田							
8	2	2	1			中新田							
9	1	3	1			中新田							
10	1	3	1			中新田							
11	1	2	2			中新田							
12	1	2	2			中新田							
13	1	2	2			中新田							
14	1	2	2			川根							
15	1	2	1			川根							
16	1	2	1			川根							
17	1	2	1			川根							
18	1	2	1			川根							

図表3-35 カスタマイズ可能なワークシートひな形

【学校横断型探究】第3回オンライン合同授業 当日用メモ 組 番 氏名 ()

授業の概要

めざすこと

- ・これまで取り組んできた内容について、他校生徒へ向けて言語化する
- ・グループ内ディスカッションを通して、自らの探究活動を振り返り新たな気づきを得る

実施日時 **ルーム番号** **表示名**

月 日 ()
13:30~15:20

自分のルーム番号
+氏名+呼んでほしい名前+学校名
【例】 1 山田太郎 たろう ○○高校

実施場所

Web会議ツール「Zoom」
Zoom URL：
ミーティン
* 1人1台で接続し、それぞれイヤホンマイクを使用する

授業の流れ ※進行状況によって変更する可能性があります

開始	終了	内容	部屋
13:30	13:35	順次入室・待機	
13:35	13:50	挨拶、参加校紹介、最近のニュース	メインセッション
13:50	15:00	ブレイクアウトルームでの交流活動 ・自己紹介 ・探究活動発表（1人5分程度） ・質疑応答・ディスカッション ・感想共有	ブレイクアウトルーム
15:00	15:10	Padletへの振り返り投稿 感想共有	メインセッション
15:10	15:15	終わりの挨拶と写真撮影	メインセッション
15:15	15:20	事後アンケート記入・順次退室	メインセッション

参加校

① 高校

② 高校

③ 高校

時間があったら...
参加校の場所を地図上で探して、印をつけてみよう！



ブレイクアウトルームへの移動方法

①「ブレイクアウトルーム」をクリック
※ボタンが見つからない場合は、「詳細」から探そう！

②自分のルーム番号を選んで「参加」
※ルームを間違えても選びなおせます！



画面共有方法

PC

- ①「共有」をクリック
- ② 共有したい画面を選択→「共有」

共有を止めるときは・・・

- ③「共有の停止」をクリック



iPad

- ① 下のメニューバー（表示されない場合は画面をタップ）中央にある「共有」をタップ
- ② 「画面」を選択
- ③ ZOOMにチェックが入っていることを確認し「ロードキャストを開始」
- ④ 共有したい画面を映す

共有を止めるときは・・・

- ① 右上の小窓をタッチ（あるいはZOOMアプリにもどる）
- ② 「共有の停止」をタッチ



結果、運営における事務局の準備コストが削減された。それだけでなく、担当教員からはグループ編成を自ら行うことで、要配慮生徒への事前準備や欠席対応など、生徒の特性に応じた柔軟な判断が可能となったと前向きな声が聞かれた。また事前に各校の探究活動の様子やコミュニケーションに不安がある生徒の情報共有を行う機会を設けたことで、各校教員がより主体的に本取り組みに参加する様子が観察できた。

②生徒間連携

オンライン合同授業以外で、似通ったテーマについて探究している生徒同士等を接続し、授業時間内や放課後の交流活動をサポートした。

◆活用の流れ

本プログラムの活用は、構成校生徒への定期的なアンケートに基づいて作成する興味関心データベース（探究活動の内容および進捗状況をスプレッドシートに一覧化した情報源）を活用した。

事務局から交流を提案する形、または構成校からの依頼を受けて事務局が同データベースを参照し相手校を検討・調整する形から始まる。相手校の承諾を得て二校を接続し、日程が確定した後に事務局がZoomリンクを発行、当日の交流活動も含めてサポートを行った。

◆交流のパターン

主な交流のパターンとしては、以下を想定して実施した。令和6年度は単発で行われる「1 情報交換」が中心であったが、令和7年度は「2 アクションへの相互協力」「3 アクションの共同実施」「4 探究活動の共同実施」といった、さらに多様かつ深まりのある協働を生み出すことを視野に、まずは同一メンバーでの継続的な交流事例を作ることを目指した。

図表3-36

1	情報交換	互いの探究活動の状況や悩みについて共有し、アドバイスを送り合う。
2	アクションへの相互協力	探究活動のアクションの一環として、ヒアリングやアンケートに協力し合う。
3	アクションの共同実施	アンケート項目やヒアリング内容を一緒に考え、実施する。
4	探究活動の共同実施	一緒にイベントを企画したり、商品開発を行う。

◆令和7年度取り組みのポイント

令和6年度の実践においては、下記のような課題が指摘された。

- 交流が一回きりに終わってしまい、継続的な交流が生まれず、学校を超えた協働的な探究活動に繋がっていない
- 事務局からの提案・呼びかけによって交流が実現することが多く、構成校からの自発的な交流希望が生まれにくい

上記を踏まえ、令和7年度は以下の取り組みを実施した。

①深い対話と継続的な交流を生み出すためのプロセス構築

- 深い対話および継続的な交流に必要な条件について仮説を立て、対話プロセスを構築する。
- 仮説の具体例としては、以下が挙げられる。
 - 各自の活動内容の紹介を中心とした情報交換だけでなく、今後のスケジュールや展望を共有する時間を設ける
 - 活動の共通点や相違点を見つける作業を通して、相互参照できるポイントを見つける
 - 意見交換をする前に、心せん等に考えをまとめる時間を設ける

②パターンに応じた交流ツールの開発

- 現在は事務局が交流のファシリテーションを担っているが、構成校の教員や生徒が自ら交流を進められるよう、上記の仮説に基づき、対話プロセスをスライド形式で示したツールを開発する。

③自発的な活用を促すための、教員・生徒双方に対するプログラム周知徹底

- 活用イメージを具体的に持ってもらえるよう、構成校教員に交流の具体的事例を共有する。

- 生徒には令和7年度新たに立ち上げた専用ポータルサイト等を通じて、こうした交流機会についての周知をはかる。

上記を念頭におき、各校から収集した生徒の探究テーマおよび他校生徒との連携希望に関する情報を活用し、興味関心ごとの個別マッチングおよび交流活動の推進を行った。

1. 実施内容

実施件数：のべ19件（2025年4月1日～2026年2月12日）

図表3-37

探究テーマ	参加校	確認された交流形式 (図表3-45参照)	特記事項
街灯で町を明るく	長崎県立宇久高等学校（1名） 長崎県立松浦高等学校（6名）	情報交換	継続実施 1回目：情報交換 2回目：近況報告
防災	青森県立三戸高等学校（3名） 福島県立只見高等学校（2名）	情報交換	学校側からの依頼
地元の観光について	青森県立三戸高等学校（1名） 徳島県立那賀高等学校（1名）	情報交換	学校側からの依頼 継続実施 1回目：情報交換 2回目：活動の振り返り
ボランティア	京都府立須知高等学校（1名） 長崎県立五島南高等学校（5名）	ヒアリング	学校側からの依頼
戦争	宮城県中新田高等学校（5名） 長崎県立猶興館高等学校（3名）	テーマ対話	学校側からの依頼
PR動画制作	静岡県立松崎高等学校（1名） 新潟県立阿賀黎明高等学校（1名）	情報交換	
地域活性化	三重県立昴学園高等学校（2名） 京都府立須知高等学校（1名）	情報交換	
学校における生徒減少	大阪府立豊中高等学校能勢分校（2名） 長崎県立猶興館高等学校（2名）	情報交換	
地域活性	京都府立須知高等学校（1名） 新潟県立阿賀黎明高等学校（1名）	情報交換	
外国人ターゲットの商品開発	静岡県立松崎高等学校（1名） 岩手県立大槌高等学校（1名）	情報交換	継続実施 1回目：情報交換 2回目：近況報告
名字の歴史	鹿児島県立沖永良部高等学校（2名） 長野県軽井沢高等学校（1名）	情報交換	
地域活性/地域の輪	長崎県立五島南高等学校（1名） 北海道池田高等学校（1名） 島根県立吉賀高等学校（1名）	情報交換	3校連携
地域の伝統行事	島根県立吉賀高等学校（1名） 青森県立三戸高等学校（1名）	情報交換	
地域の伝統芸能	島根県立吉賀高等学校（1名） 宮崎県立福島高等学校（1名）	情報交換	

環境問題	鹿児島県立沖永良部高等学校（1名） 新潟県立阿賀黎明高等学校（3名） 静岡県立川根高等学校（2名）	情報交換	3校連携
子ども食堂	宮崎県立福島高等学校（1名） 静岡県立松崎高等学校（1名）	情報交換	

生徒間交流を実施した生徒および、該当生徒の探究活動の支援を担当する教員を対象に事後アンケートを実施し、所感を尋ねた。（生徒 n=46/教員 n=23）

図表3-39 【生徒】本日の交流会について、あてはまるものを選んでください。

非常に満足	78.26%
やや満足	21.74%
どちらともいえない	0%
やや不満	0%
非常に不満	0%

図表3-40 【生徒】今後、交流を続けたいですか。あてはまるものを選んでください。

	同じメンバー	違うメンバー	違うテーマ
とてもしたい	58.70%	39.13%	19.57%
ややしたい	17.39%	39.13%	32.61%
どちらともいえない	23.91%	19.57%	39.13%
あまりしたくない	0%	2.17%	6.52%
全くしたくない	0%	0%	2.17%

図表3-41 【生徒】アンケート自由記述回答抜粋

- 同じテーマで防災探究をしており、今後自分たちの活動のヒントになると思ったから。
- 自分には出なかったアイデアや勇気がなくできなかったことを〇〇さんはしていて自分も真似たいと思いました。交流をしたことによってその地域の情報を知ることができて良かった。
- 自分が今まで行ってきたボランティア活動を振り返ることができたり、他の人の活動を聞いて学びを深めたりできたから。

図表3-42 【教員】今回の生徒間交流について、あてはまるものを選んでください。

非常に満足	73.91%
やや満足	26.09%
どちらともいえない	0%
やや不満	0%
非常に不満	0%

図表3-43 【教員】今後の交流について、どう思いますか。あてはまるものを選んでください。

	同じメンバー	違うメンバー	違うテーマ
とてもさせたい	39.13%	39.13%	34.78%
ややさせたい	30.43%	43.48%	52.17%
どちらともいえない	30.43%	17.39%	13.04%
あまりさせたくない	0%	0%	0%
全くさせたくない	0%	0%	0%

図表3-44 【教員】アンケート自由記述回答抜粋

- 平和学習をすすめる上で、目標や意義を明確にするヒントをたくさんいただき、勉強になった。生徒たちも少しずつ、自分で考えられるようになってきた。
- こちらでは取り組んでいないことを取り組んでおられていろいろな方法があることを生徒達は知ることができたと思います。次のアクションをどうするか考える際にとっても参考になると思います。
- とにかく同年代と話して気付くという経験ができることが何よりも良い。

2. 成果と課題

■ 生徒間交流のパターンとモデルタイムラインの作成

令和7年度は、現時点で19件の交流が実施され、下記の通り複数の交流形式が生まれた。

図表3-45 確認された交流形式

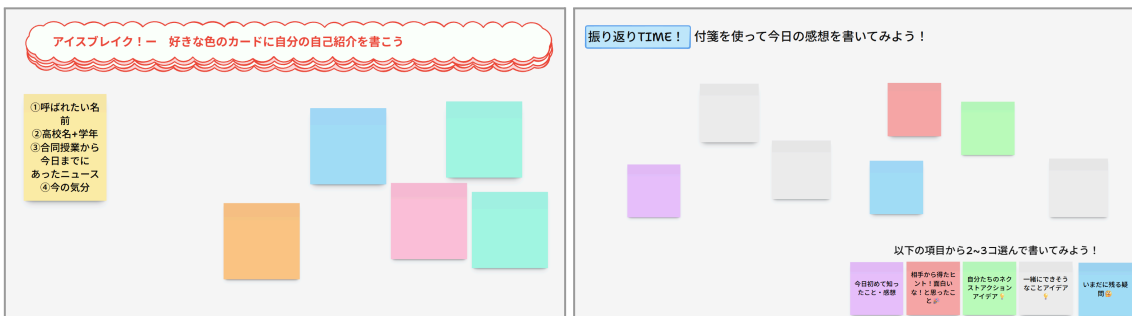
情報交換	近しいテーマもしくは手法で探究活動を行う生徒同士が、互いの活動内容を紹介合う形式。本取り組みにおいては最も一般的。
ヒアリング	自身の探究テーマに関連する活動を行う他校生徒に、ヒアリング目的で交流を依頼する形式。 事例：「人はなぜボランティアを行うのか」をテーマに探究活動を行う生徒の伴走支援を行っている連携校教員より、ボランティア活動を実践している他の連携校生徒へのヒアリング機会を作ることができないか事務局に相談があり、調整を行った。依頼生徒にとって貴重なデータ収集の機会となっただけでなく、ヒアリングを受けた生徒たちからも自身の経験を振り返る良い機会になったという声が聞かれた。
テーマ別対話	各自の探究活動に関連するテーマで、深く対話を行う形式。 事例：地域の高齢者へ戦争体験の聞き取りを行う探究活動を実施している連携校教員より、「戦争」をテーマに他校と対話する時間を持ってないかと事務局に相談があった。類似したテーマで活動する連携校がなかったため、平和学習を積極的に推進する連携校を紹介し、交流が実現した。各校の生徒からは、対話から新たな学びが多くあり、新しい情報や視点を得られたとともに、自身の思いや考えに改めて気づくことができたという声が挙がった。

令和7年度は、交流のファシリテーターとして事務局スタッフが同席し、将来的な自走を見据えて交流形式毎にモデルタイムラインや進行スライドのテンプレート制作を行った。

図表3-46 モデルタイムライン例（形式：情報交換）

時間（分）	内容
2	イントロダクション ファシリテーターより、以下を伝達する ①お互いの「気になる！」をたくさん聞いてみよう ②お互いの活動のこれからを一緒に考えてみよう
10	アイスブレイク それぞれの生徒が、以下のようなトピックを共有する ①呼ばれたい名前 ②高校名と学年 ③最近あったニュース ④今の気分
3	今日持ち帰りたいことの共有 それぞれの生徒が、今日をどのような時間にしたいかを表明する
10	プロジェクト共有 それぞれの生徒が、自身の探究活動内容を相手に紹介する ①テーマに興味を持ったきっかけ ②今までやってきたこと ③今後やってみたいことやスケジュール ④悩んでいること／困っていること
15	質疑応答 互いの発表について、気になった点を質問し合う
15	振り返りタイム 下記のような観点で、リフレクションを行い共有する ・ 今日初めて知ったこと ・ 互いの活動の共通点や相違点 ・ 相手から得たいヒント！面白いと思ったこと ・ 自分たちのネクストアクションについてのアイデア ・ 一緒にできそうなことについてのアイデア ・ いまだに残る疑問
5	クロージング 今後の交流についてアイデアを出し合い共有する ・ 近況報告 ・ ○○について一緒に考える ・ ○○について一緒に活動してみる

図表3-47 進行ツールテンプレート例



■ 継続的な交流の実現について

前述したモデルタイムラインや進行スライドのテンプレート制作にあたっては以下の工夫を施し、交流時間の充実を図ることで令和6年度には見られなかった複数回にわたる継続的な交流事例が生じた（※実施内容「特記事項」参照）。

- アイスブレイク時間の確保：交流の冒頭で、それぞれの自己紹介を兼ねたアイスブレイクを実施し、互いの人柄について知る時間を設けた。
- 将来展望の共有：活動実績の紹介に留まらず、今後の計画やアイデアを共有する時間をプログラムに組み込んだ。
- 接点の可視化：探究テーマの共通点・相違点を整理するワークを取り入れ、互いの活動の接点を発見し、自分事として参照し合えるよう促した。

一方で、当初想定していたアンケートおよびヒアリングの共同実施や学校を超えた協働プロジェクトの立ち上げについては、交流に参加した生徒から複数回アイデアが上がったものの、各校のスケジュール都合等により実現には至っていない。こうした深化の兆しを次に繋げるため、より安全かつ確実な連絡手段の検討などを検討していく必要がある。

■ 個別マッチングから実施にいたるまでの運用フローについて

個別マッチングから実施に至るまでのプロセスについては、連携校からの個別打診があったケース（※実施内容「特記事項」参照）を除き、事務局から連携校へ情報提供する形で行った。

具体的には、事務局がオンライン合同授業の準備にあたって収集した生徒の探究テーマおよび外部との交流意欲の程度を一覧化し、「興味関心データベース」を作成。このデータベースを参照しながら計85件の個別マッチングを行い、連携校教員を通じて該当生徒へ打診を行った。その後生徒本人の意向確認が取れた組み合わせについて、個別に日程調整を行うフローを採用した。

こうした事務局主導型の運用について連携校教員へヒアリングしたところ、下記のような肯定的な声が聞かれた。

図表3-48 個別マッチング提案に対する連携校教員所感

- 事務局の提案により、教員側が把握しきれていない「生徒の外部交流への意欲」を知ることができた。
- 多忙な教員にとって自ら情報を探索し個別の交流を他校へ相談するハードルは高い。事務局から具体的なマッチング案を提示してもらえたことが、交流実施の後押しとなった。
- ふだん伴走を行っている教員からの提案ではなく、事務局からの打診であるということで、生徒に声をかけやすかった。

一方で、事務局が各工程を仲介するフローは連絡遅延等を招きやすく、運用効率に課題を残した。個別マッチングおよび提案は従来通り事務局側が積極的に実施し、マッチング合意後の日程調整や当日のファシリテーションを連携校教員や生徒に委ねる運用が必要である。そうすることで、連絡の迅速化と実施件数の拡大が図れるだけでなく、教員間の直接対話による相互理解が深まり、事前準備の質向上も期待できる。

【付録資料】事前アンケート設問

・合同授業第2回・第3回の1か月程度前に以下の項目でアンケートをとり、探究活動のテーマや進捗状況、学校をこえた生徒やサポーターとの交流の希望を調査（Googleフォーム形式）

図表3-49

- あなたが今の時点で取り組んでいる探究テーマは何ですか？できるだけ具体的に書いてください
- 上で答えたテーマのカテゴリとして最も近いものを以下から1つ選んでください（28カテゴリの中から選ぶ）
- 上で答えたテーマのカテゴリとして2番目に近いものを以下から1つ選んでください（28カテゴリの中から選ぶ）
- あなたの探究活動の進み具合として最も当てはまるものを教えてください
 - 1. テーマを考えている段階
 - 2. テーマの下調べ（Webや本）をしている段階
 - 3. テーマに関する調査（アンケート・ヒアリング・フィールドワーク・実験など）をしている段階
 - 4. テーマに関するイベント企画・実施や作品制作をしている段階
 - 5. テーマについての整理・分析を行っている段階
 - 6. テーマについてまとめ・発表をすすめている段階
- 探究活動の中で、特にやったこと／もしくは今後やっていきたいと思っていることを1つ教えてください
 - 提案・宣伝
 - イベント実施
 - 商品開発
 - 作品制作
 - 研究レポート作成
 - わからない／決まっていない
 - その他
- あなたの探究活動の今後の予定について教えてください（あてはまる選択肢がない場合は、【その他】へ記入してください）
 - 今年度で、このテーマでの探究活動は終了する
 - 来年度以降も、このテーマでの探究活動を継続する
 - 未定／迷っている
 - その他
- あなたの探究活動と進路（卒業後の進学・就職先など）のつながりについて教えてください（あてはまる選択肢がない場合は、【その他】へ記入してください）
 - 探究テーマに近い進路を考えている
 - 探究テーマと進路はあまり関連がない
 - 未定／迷っている
 - その他
- オンライン合同授業以外で、自分のテーマについて他校の生徒と情報交換や相互協力をすることに関心がありますか
- オンライン合同授業以外で、自分のテーマについて専門家や探究活動の経験がある大学生に相談をすることに関心がありますか

3.2. プラットフォーム構築に向けた取り組み

①コアサポーター活用

探究活動の経験がある大学生や専門性のある社会人（コアサポーター）を人材バンク化し、構成校の生徒がオンラインにてサポートを依頼できる体制をつくる。

◆概要

オンライン合同授業に参加した探究活動に関心のある大学生や社会人、および各校の関係者に案内し、希望性による登録で人材バンクを形成している。コアサポーターのプロフィールを構成校のポータルサイトへ掲載し、構成校の生徒はそこから自身の関心やニーズに近いバックグラウンドを持つコアサポーターを選び、1回1時間程度のオンライン面談を依頼することができる。

コアサポーターにはプロフィール情報の一環として、「情報収集のためのヒアリング」「生徒のプロジェクトへの助言」「一緒に企画・活動」「人の紹介」「テーマ設定段階での相談・考えの整理」といった選択肢の中から、どのような形で力になれるかを選択する（複数選択可）。

生徒はポータルサイトに掲載されたサポーターに面談を申し込む際、同じく「情報収集のためのヒアリング」「プロジェクトへの助言」等の選択肢の中から面談の趣旨を選ぶほか、具体的な依頼内容や希望する日程等について入力する。本事業内では担当教員と連携しながら日程等の調整を行う形をとるため、担当教員の確認に関する設問も申込フォーム内に設けた。

1. 実施内容

- ・コアサポーター登録人数：47名
- ・令和7年度の活用例数：14件

図表3-50

テーマ	対応サポーター属性	連携校
防災医療	大学生	青森県立三戸高等学校 ※学校側からの依頼
淡水魚と海洋魚の混泳	フリーランス	長崎県立宇久高等学校 ※学校側からの依頼
廃プラスチックの活用	大学生	
怪談噺の由来と地域の出来事の関連性	団体職員	
偏食フクロモモンガ向けおやつ	フリーランス	
虫が寄ってこない方法	団体職員／研究員	
猫の新たなおやつ開発	フリーランス	
こどもと保育	団体職員／研究員	
経営・経済・経営工学	大学生	岩手県立大槌高等学校 ※学校側からの依頼
狩猟/鳥獣被害	教職員(コーディネーター)	青森県立三戸高等学校 ※学校側からの依頼
ボランティア	団体職員	京都府立須知高等学校
スポーツ教室の開催	大学生	長崎県立松浦高等学校
外国人ターゲットの商品開発	コンサルタント	静岡県立松崎高等学校
空き家活用	大学生	長崎県立松浦高等学校

コアサポーターを利用した生徒および、該当生徒の探究活動の支援を担当する教員および、サポーターを対象に事後アンケートを実施し、所感を尋ねた。（生徒 n=15/教員 n=3/サポーター n=17）

図表3-51 【生徒】 本日の面談について、あてはまるものを選んでください。

非常に満足	80.00%
やや満足	20.00%
どちらともいえない	0%
やや不満	0%
非常に不満	0%

図表3-52 【生徒】 今後の面談について、あてはまるものを選んでください。

とてもしたい	66.67%
ややしたい	26.67%
どちらともいえない	6.67%
あまりしたくない	0%
全くしたくない	0%

図表3-53 【生徒】 アンケート自由記述回答抜粋

- 体験談を聞くことができ、とても参考になりました。自分たちが気づいていない計画の穴を教えてください、より今後の活動が行いやすくなりました。
- 私は飢餓で苦しむ野良猫を助けるために新たなおやつを開発するという探究活動をしたいと思っていたけど、それにはメリットだけではなく寿命が伸びて数が増加するなどのデメリットもあるということがわかりました。そして、地域の人と意見で対立する可能性もあるからそのこともしっかり考えることができました。

図表3-54 【教員】 本日の面談について、あてはまるものを選んでください。

非常に満足	100.00%
やや満足	0%
どちらともいえない	0%
やや不満	0%
非常に不満	0%

図表3-55 【教員】 今後の面談について、どう思いますか。あてはまるものを選んでください。

とてもさせたい	100.00%
ややさせたい	0%
どちらともいえない	0%

あまりさせたくない	0%
全くさせたくない	0%

図表3-56 【教員】アンケート自由記述回答抜粋

- 面談直後に生徒と話をしましたが、聞きたかったことに対する的確なアドバイスをいただけたとニコニコしながら報告してくれました。

図表3-57 【サポーター】本日の面談について、あてはまるものを選んでください。

非常に満足	47.06%
やや満足	52.94%
どちらともいえない	0%
やや不満	0%
非常に不満	0%

図表3-58 【サポーター】アンケート自由記述回答抜粋

- (前略) セッションでは、私が用意した質問を投げかけながら、〇〇さんの探究テーマを深掘りするだけでなく、多角的な視点を取り入れること、そして自然と人間が共生する生物多様性という、より大きな命を感じることに意識を広げてもらえるよう努めました。その結果、〇〇さんの新たな関心を引き出し、将来の進路にもつながるような、示唆に富んだ時間になったと感じています。

2. 成果と課題

令和7年度は、登録サポーター数・活用件数ともに令和6年度より増加し、ネットワーク内での本制度の認知が広がりつつある様子が見えてきた。事務局からのコーディネートではなく、連携校が自発的に相談を申し込む形での依頼も増加しており、本制度が少しずつ連携校にとって身近な資源となりつつあることを示唆している。

活用パターンは探究活動における専門的なヒアリングや今後の活動方針の相談に留まらず、自身の関心領域と関連させた進路相談など、生徒のニーズに応じた柔軟な運用がなされた。また、一対一の面談だけでなく、授業時間内に複数のサポーターを同時に招き「オンライン相談会」を開催する事例や、連携校のコーディネーターがコアサポーターとして他校の生徒の相談に乗るといった、学校の枠を超えた横断的な連携も確認された。連携校の中には、すでに近隣地域内に充実した探究支援ネットワークを構築している学校もあるが、本制度は一地域で補いきれないサポート人材の依頼先となっている。

図表3-59 授業時間内に複数のサポーターを同時に招き「オンライン相談会」を開催した事例

事例#10 (長崎県宇久高等学校 × コアサポーター)
『探究の時間にコアサポーター面談の活用』

同じ時間に生徒それぞれが複数のコアサポーターに面談を依頼して相談会が開催されました！

① カタリバ事務局スタッフ 教育フリーランス
#自然・生物 #生態学・進化学 #環境・エネルギー

テーマ1：淡水魚と海水魚の混泳
テーマ2：偏食のフロモモンガ向けのバランスの良いおやつ作り
テーマ3：猫の新たなおやつ作り

活動へのアドバイス：
・「決めた探究テーマはすでに誰かが着手していた」≠「やる必要がないこと」→自分が決めた背景を深掘りしながら、学びを深めていく。
・外へ出て調べる（取材等）ときは、事前に確認したいこと・質問事項を整理しておく。また観察の目は非常に鋭いものがあるので、ぜひその力を生かしてみよう。
・どちらを取るか？という二項対立ではなく、どちらも取る方法をプロジェクトの中で模索してみると、それは社会にとってメインバクトのあるものになるはず。

面談の様子：
現状足りない知識を把握できた！ ネットだけでは調べられない情報も聞くことができた！ 自信をもって探究活動に取り組みことができそう！

コアサポからのメッセージ：
怪談×民俗学（郷土学）、興味深いテーマなのでこのまま進んで良いと思います。調査を進めるにあたり、様々な人に教わりたりヒアリングしたりする場合があります。方法を様々なで（聞き取り調査、アンケート調査等）、周りに合わせることもなく自分らしく、何より楽しく探究を進めていただけたらと思います。応援しています！

② #図書館 #海外協力隊、青年教育

テーマ：怪談話の由来とその地域で起きた出来事の関係性

面談の様子：
「本を読むことが好き」「将来は本に関わるようなお仕事をしたい」という思いからテーマを模索。自分の探究の成果が周囲に与える影響と、調べた後の活用法に悩んでいたが、郷土文化の内外への発信という点に落ち着いた。

コアサポからのメッセージ：
いろいろな研究方法があると学ぶことができました！ 悩んでいたことが少し解決できてうれしい！

③ #教育・国際交流・自然 #地球環境 #持続可能な社会の実現

テーマ：虫が寄ってこない方法

面談の様子：
さんが用意した質問を投げかけながら、生徒の探究テーマを深掘りした。また多角的な視点を取り入れることで、自然と人間が共生する生物多様性という、より大きな命を感じることに意識を広げていた。最後には生徒の新たな関心を引き出し、将来の進路にもつながる時間になった。

コアサポからのメッセージ：
今回の探究テーマは、生物多様性という素晴らしい視点を与えてくれました。ぜひ自然について深く掘り下げてみてください。きっと、まだ知らないことに出会ったり、様々なことにつながる新しい視点にわくわくするはずです。

面談の様子：
生態系のバランスや様々な職業に植物や生物がかかわっていることがわかった！

④ #幼児教育・環境教育 #学びづくりの場

テーマ：こどもと保育

面談の様子：
「子どものストレスになっていることをどうにかしたい」という優しい気持ちからこのテーマを選んだ生徒さん。さんの研究してきた内容を聞きながらたくさんメモを取る様子が見られた。

コアサポからのメッセージ：
探究のテーマと問題意識が私の専門と合致していて、お互いにとって良い刺激を与え合う時間を過ごすことができました。探究が進んでいく中いろいろな場面で戸惑うかもしれませんが、その過程こそが、誰かの心に届く活動へとつながっていきます。これからのいろいろな気づきを得て探究し、保育の可能性を広げることができると思います！

面談の様子：
自分の知らない取り組みや海外と日本の環境の違いについて知ることができて面白かった！ 自分の住んでいる地域でも取り組めそう！

図表3-60 連携校の一つに所属するコアサポーターが、別の連携校の生徒に伴走した例

事例#13 (さん × 青森県立三戸高等学校)
『狩猟・鳥獣被害についての探究』
～さんの伴走支援～

コアサポ面談の流れと概要

○生徒より、活動の目的と現状の共有
・探究のテーマは、「狩猟に関わりたい人を増やす」こと
・狩猟の目的や、鳥獣にねらわれやすい作物、狩猟資格をとることの難しさ、狩猟に必要な道具、実際に狩猟をしている人に話を聞きながら調べた。
・鳥獣被害に関するグラフを収集した

○さんからのアドバイス
・山形県小国町に住む人の獣害対策や被害状況について共有
・狩猟に関するイベントの紹介
・高校生が狩猟についてどんなアクションができるかについてアドバイス
→狩猟を身近に感じてもらう活動をしてみたいかどうか？
例) 狩猟免許試験の問題を使ったクイズをつくる
箱置を作ってみて文化祭で体験活動をする
・狩猟の楽しさやカッコよさをまずは伝えてみたらどうか

○今後の活動について
・地域の人にヒアリングし、鳥獣被害の困り感について調査し、狩猟の必要性の裏付けをとる予定。

コアサポからのメッセージ

若い人で狩猟者が減っているのは事実ですが、東京の大学とかでは5-60人規模の狩猟サークルが活動しているのも事実。実は都市をはじめとして狩猟に興味のある若者は潜在的に増えているのではないかと思っています。その背景には親世代から都市で生まれて都市で育った若者がリアルな農村、田舎、山、野生を求めているのではないのでしょうか。三戸高校の皆さんの活動はそういった令和の若者の先導をいっていると思います。獣害という実生活レベルの課題をきっかけに国を動かす大きな流れもつくることができる取り組みだと思います。引き続き応援しています。

事務局からのコメント
大学時代から狩猟に関する活動をしているさん。狩猟に関する豊富な知識や体験談をたくさんお話しいただきました。また、「狩猟に関わる人を増やす」ための視点として、鳥獣被害の深刻さを訴えるだけでなく、狩猟の楽しさやカッコよさを伝えるのはどうかという新たな視点を生徒が得ることができていました。

一方、課題も明らかになった。まず、本プログラムはボランティアであるサポーターと生徒が直接対話する形態をとっているが、生徒からの質問が早めに終わってしまう場合などに、進め方に戸惑いが見られるケースがあった。こうした交流にあたっては、サポーター向けの「交流の手引き」や、生徒が事前に思考を整理するための「簡易ワークシート」といったツールを容易する必要がある。

また、今年度は事務局より連携校教員や生徒に対して定期的な事例共有レポートの発信やコアサポーターのプロフィール紹介を行ったが、各サポーターの専門性や「力になれること」をより直感的に把握できるよう情報を整理し、具体的な活用イメージをより明確に提示していくといった工夫が考えられる。また交流後のアンケートでは「一度関わった生徒のその後が気になる（サポーター）」、「機会があればまた話したい（生徒）」といった継続的な交流を望む声も多く見受けられる。単発の相談に留まらず、サポーターと生徒が中長期的に繋がり、活動を見守ることができるようプラットフォームの構築についても、今後の課題となる。

②教員間連携

構成校教員同士の交流機会の設定や合同研修の開催、コミュニティ運営等を通じ、構成校教員およびコーディネーター同士の連携強化をはかる。

◆令和7年度取り組みのポイント

令和6年度の実践においては、①教員の自発的なネットワーク活用、②教員同士の相互コミュニケーションの活性化に課題が残った。それらをふまえ、以下の取り組みを実施した。

①ネットワーク参加教員の裾野拡大

- 自発的なネットワーク活用を推進するためには、窓口担当教員だけでなく、日々の探究伴走に関わる教員全員が本事業の趣旨や活用方法を理解していることが重要である。
- これまでは事務局との窓口担当教員にのみ事業趣旨を説明していたが、令和7年度は全教員を対象とする説明会の実施や、窓口担当教員代理として校内に複数名の補佐役を配置していただくなどして、本ネットワークに関心を持つ教員を増やすことを目指す。

②交流機会における情報交換の促進

- 教員同士の顔の見える関係づくりのため、オンライン合同授業の打ち合わせ会・振り返り会の中で、教員同士が悩みを共有し、情報交換できる機会を拡充する。

③オンラインでの継続的な情報発信

- Slackや教員専用ポータルサイトを通じて定期的な情報共有を行い、教員間の連携を日常的に支える仕組みを整える。

◆令和7年度実施事項

a. 事業説明会の開催（全教員対象）

新規事項として、オンライン合同授業に参加する学年の探究活動に関わる教員を対象とする説明会を実施した。説明会では、オンライン合同授業の流れや運営上の留意点を共有し、授業実施に向けた理解と準備を図るとともに、その他プログラムの具体的事例を紹介し、ネットワーク活用のイメージを持てるようにした。併せて、ZoomやPadlet等のICTツールの基本操作を確認し、教員の不安を解消するとともに円滑な授業運営につなげることを目的とした。

○日時：

- ・ 4月21日（月）22日（火）23日（水）24日（木）25日（金）のいずれか
16：00～16：45 ※全日程同一内容

○内容：

- 本事業の概要
- プログラム紹介および活用方法
- 第1回オンライン合同授業の流れ
- Zoomの基本操作およびトラブルシューティング
- オンライン掲示板Padletの基本操作
- 教員同士の交流

○実施結果：

全日程合わせて61人の教員が参加した。事後アンケートにおいて、参加したすべての教員から、事業の内容やオンライン会議システムの使い方等について理解が深まったとの回答が得られた。また参加者のうち約6割の教員が後述のSlackコミュニティへの登録を希望した。

b. 夏季合同ミーティングの開催（全教員対象）

毎年8月に実施している構成校全教員対象の交流および研修会である。令和7年度は、「外部とのつながりがひろく探究の可能性—小規模校の実践から考える伴走支援のあり方」と題し、構成校の一つである山形小国高等学校の事例を取り上げ、地域や外部人材との関わりによって生徒の探究を深めていくプロセスや、その背景にある支援体制の工夫を担当教員との対話形式にて紹介した。特に、学校内外の多様な関係者を巻き込んだ小規模校ならではの探究の進め方や、本ネットワークの活用法に注目し、参加者が自校での展開を具体的にイメージできる機会とした。

○日時：2025年8月4日（月） 13:30～15:00

○登壇者：

- ・山形県立小国高等学校教諭
- ・認定NPO法人カタリバ担当者（モデレーター）

○内容：

図表3-62

時間	内容	詳細
10分	導入	趣旨説明
30分	小国高校による実践共有	山形県立小国高校の探究カリキュラムの共有および探究活動の伴走支援体制構築について
10分	質疑応答	参加者からの質問受付
30分	ブレイクアウトルームでのディスカッション	参加者同士での意見交換。自校の課題の共有や対応策に関する協議
10分	プラットフォーム活用事例紹介	外部人材との接続事例等について説明

c. コミュニティ運営（全教員対象）

◆概要：構成校の教員同士の情報交換や連携を促すため、Slackの専用ワークスペースを設定する。本ネットワークの活用方法紹介等を中心に、週1回程度の情報発信を行った。

◆Slackを活用した連携事例：

・探究活動の一環で教員向けにアンケートを実施していた構成校の生徒が、自身の町内の教員のみでは十分な回答数を集められなかったため、担当教員を通じてSlackにて本事業の構成校教員に回答を依頼した。その結果、構成校の教員から40件程度の回答が得られた。

図表3-63 Slack上で依頼されたアンケートへの協力依頼

学校名	探究テーマ	
北海道池田高等学校	起立性調整障害	教員へのアンケート
茨城県小瀬高等学校	モータースポーツを広めたい	生徒への意識調査
茨城県小瀬高等学校	ガチャガチャについて	生徒へのアンケート
茨城県小瀬高等学校	ゲームについて	生徒へのアンケート
片山学園高等学校	校則	生徒へのアンケート
青森県立三戸高等学校	ドラマに関する探究	生徒へのアンケート

青森県立三戸高等学校	推しに関する探究	生徒・教員へのアンケート
青森県立三戸高等学校	特産物の商品開発	教員へのアンケート

d. 打ち合わせ会・振り返り会での交流機会の設定（担当教員対象）

◆概要：

オンライン合同授業の前後に実施する窓口担当教員対象の打ち合わせ会・振り返り会において、そこで探究活動に関する情報交換や悩みの共有を行う時間を設けた。

●「打ち合わせ会」で行われた情報交換テーマ（各校での探究活動に関する情報交換中心）

図表3-64

- 各校の探究活動の現状：個人かグループか、テーマ設定を地域課題にするか個人の興味にするかといった実施体制の共有
- 「問い立て」の指導法：調べ学習で終わらせず、問いを深めるための工夫（「誰かの役に立つテーマ」への誘導など）
- 外部連携とアンケート調査：他県の生徒や幅広い層にアンケートを依頼する際の手法や、先生同士の連携体制
- 探究の質と時間の確保：3年生の単位数や進路活動との兼ね合い、先輩のテーマを引き継ぐことの難しさ
- 仮説の立て方と検証：自分の思い込みで終わらせないための、現状把握や検証方法への工夫
- 教員・サポーターの不足：グループ探究を支援する際の人員確保や、地域の協力者とのペアリング

●「振り返り会」で行われた情報交換テーマ（オンライン合同授業の成果と課題中心）

図表3-65

- 生徒の変容と成長：ICT機器の扱いやオンライン交流への慣れ、他校の生徒の様々な考え方に刺激を受けた様子
- 教員の負担感：資料のPDF変換や端末準備などの事務作業の重さと、生徒の充実感とのバランス
- 司会生徒の運用：生徒の選定方法（教員が選出、立候補、ローテーション）や、事前ミーティングの負担感と効果
- 配慮が必要な生徒への対応：場面緘黙やASD、対人不安のある生徒に対し、教員が付き添って現場で対応する、生徒管理情報シートで特性を共有するといったサポートのあり方
- 探究を深めるための工夫：単なる交流に終わらせないためのデータ分析スキルの習得や、外部講師（大学生や専門家）の活用についての情報交換
- Padlet（パドレット）の活用：Padletの使用について、生徒の興味を惹きやすく使いやすかった点
- 教員のスキルアップ：他校の生徒に伴走することが、教員自身の支援スキルの向上や研修に繋がったという声があがった

●各校における探究活動の課題：

「打ち合わせ会」「振り返り会」では各校の探究活動に関する課題意識についても意見交換を行った。

図表3-66 探究活動の質と指導法に関する課題

「調べ学習」と「探究」の境界線	「調べ学習」と「探究学習」の違いが分からず、単なる調べ学習で終わってしまい、多くの生徒が深い学びや問い立てに至らない。
仮説の弱さと検証	生徒にどのように「問い」を立てさせるべきか、また自分の思い込みによる「弱い仮説」をどう検証・改善させるか。
問い立ての指導	生徒にどのように問いを立てさせるか、その具体的な指導法を模索している

図表3-67 生徒の主体性と意欲に関する課題

活動時間の不足と自走の難しさ	授業時間内だけで終わらせようとする生徒が多く、放課後や休日に自主的に動く生徒が少ない。
進捗の二極化	意欲的に取り組む生徒と、主体性が低く何をしていたらいいかわからない生徒との差が大きく、どちらに合わせるべきか苦慮している。

図表3-68 学校内の体制づくりの教員間の連携に関する課題

教員間の意識の乖離（足並みのそろえ方）	担当教員間でも考え方が一致しなかったり、多忙な他学年の教員や進路担当などの理解・協力を得ることが難しかったりする。
伴走スキルの不足	教員自身の「伴走力」への不安や、生徒の興味をどう引き出すかという声掛け・仕掛けのノウハウを求めている。
人員不足	教員一人あたりが担当する生徒数が多く、個別に伴走しきれない体制。

図表3-69 外部連携と手法に関する課題

広域アンケートの手法	自校内や地域だけでなく、他県や幅広い層に対してどのようにアンケートを依頼し、信憑性を高めるか。
コアサポーターの活用	専門家であるコアサポーターを、生徒の主体性を損なわずにいかに効果的に活用するかの匙加減。
大学や専門家との連携	データサイエンスのレクチャーや大学生からのフィードバックなど、外部の知見を取り入れる具体的な方法の検討。

◆成果と今後に向けた課題

令和7年度は、全教員対象の説明会や夏季ミートアップの実施、Slackによる情報発信強化、打ち合わせ会・振り返り会での交流時間拡充等により、教員間のつながりが広がり、情報共有の裾野も拡大した。実際に個別の交流依頼や生徒調査への協力など、ネットワークを活用する事例が生まれている。一方で、教員同士のコミュニケーションが活性化するためには事務局のファシリテートが必要であるため、今後はコミュニティの主体的な活用をいかに促していくかが課題である。

4. 令和7年度成果および課題の検証

4.1 オンライン連携が生徒および教員にもたらす効果に関する調査

4.1.1 概要

本事業を通して生じた生徒および教員の変化を、本事業の効果として位置づけ、定量的に把握することを目的にアンケート調査を実施した。また、その結果をより具体的に把握するため、補助的にヒアリング調査を実施した。

図表4-1

調査目的	本事業の探究活動および自身に対する効果を定量的・定性的に把握する
調査方法	Webフォームを活用したアンケート調査 オンライン会議システムを使用したヒアリング調査（補助的調査）
調査対象	本事業に参加した学校に属する生徒および教員
調査時期	2026年1月～3月（第3回オンライン合同授業後）

アンケート調査には31校703名の生徒および22校50名の教員から回答があった。生徒の学年及び教員の役職名は以下のとおりである。

図表4-2 生徒学年

学年	人数	構成比(%)
1年生	123	17.5
2年生	549	78.09
3年生	31	4.41
合計	703	100

図表4-3 教員役職名 ※複数回答

役職名	人数
学年主任	9
担任	28
副担任	13
探究担当	17
学年付	4
コーディネーター	2
サポーター	1
主幹教諭	1
合計	75

またアンケート調査のあと、オンライン会議システムを使用し生徒（4名）・教員（4名）に追加ヒアリングを実施した。いずれも、本事業のプログラムを複数活用した者を対象とした。

4.1.2 オンライン連携を通じた生徒に対する効果

4.1.2.1 生徒の探究活動に対する効果

生徒の認識

生徒に対して本事業を通じた探究活動に対する変化を尋ねた結果、各項目の肯定的回答率は概ね85%以上であり、多くの生徒が何らかの変化を感じていることがわかった。具体的には、情報収集の方法を増やしたり見直したりした（87.48%）、整理・分析・考察の観点を増やしたり見直したりした（90.75%）、発表やプレゼンテーションの仕方を工夫した（88.63%）など、探究活動の過程に関わる項目で高い肯定的回答率がみられた。また、探究活動に関するスケジュールを自分で立てたり計画的に準備したりできるようになった（86.63%）という結果からは、定期的なオンラインでの交流参加により、探究を進める上での計画性にも一定の変化が生じていることが示唆された。

また、「自分の探究活動に自信が持てるようになった」（89.90%）や「探究活動に意欲的に取り組もうと思えるようになった」（91.89%）といった項目では特に高い値がみられ、生徒の自己効力感や意欲の向上につながっている可能性が示された。一方で、「問いやテーマを具体的にしたり、変えたりした」（76.24%）は他の項目と比較してやや低い値であり、探究の問いの再設定については、一定の成果がみられるものの、他の活動と比べて変化を実感しにくい側面がある可能性も考えられる。

図表4-4 探究活動に対する効果（生徒アンケート）

	とても そう 思う	少し そう 思う	あまり そう 思 わない	全く そ う 思 わ ない	肯定的 回答率	項目平 均
学校横断型探究プロジェクトを通して、問いやテーマを具体的にしたり、変えたりした	215	321	99	68	76.24	2.97
学校横断型探究プロジェクトを通して、情報収集の方法を増やしたり、見直したりした	275	340	66	22	87.48	3.24
学校横断型探究プロジェクトを通して、整理・分析・考察の観点を増やしたり、見直したりした	289	349	43	22	90.75	3.29
学校横断型探究プロジェクトを通して、発表やプレゼンテーションの仕方を工夫した	287	336	58	22	88.63	3.26
学校横断型探究プロジェクトを通して、探究活動に関するスケジュールを自分で立てたり、計画的に準備したりできるようになった	252	357	67	27	86.63	3.19
学校横断型探究プロジェクトを通して、自分の探究活動に自信が持てるようになった	305	327	54	17	89.90	3.31
学校横断型探究プロジェクトを通して、探究活動に意欲的に取り組もうと思えるようになった	316	330	43	14	91.89	3.35

図表4-5 探究活動に対する効果（生徒ヒアリング）

- 交流の中で聞いた意見によって、自分の探究を改善したり見直したりした。行き詰っていた中で、意見をもらえたから進めることができた。また、他校生徒の活動を知って、実際に動いて得られる・変わることはたくさんあると思え、モチベーションが上がった（2年生/合同授業・生徒間交流・コアサポーター制度に参加）
- 自分たちのあたりまえや日常で使う言葉が、他の地域の高校生には伝わりづらいということに気がついた。発表の際には、他の人がすぐわかるような表現や言葉を考えながら伝えることを意識するようになった。（2年生/合同授業・生徒間交流・コアサポーター制度に参加）

- SNSに投稿した動画が伸びず、やる意味を見失いかけていたところ、他校生やサポーターに「フォローするよ」とか「楽しみにしてるよ」と声をかけられ、前向きな気持ちに変わった。数字ばかりを気にしていたが、中身をちゃんと見てみようと思った。（2年生／合同授業・生徒間交流に参加）
- 交流を通して、賞賛してもらえると自信がついた。共感や応援をしてもらったら、がんばろうと思えた。（2年生／合同授業・生徒間交流に参加）
- 第3回合同授業で熊について探究をしている生徒の話の聴き、その地域にとって身近な問題を解決しようとしている高校生がいることに驚いた。自分自身も、もっと地域活性にかかわりたいと思った。（2年生／合同授業・生徒間交流に参加）

教員の認識

また、教員に対しても本事業を通じた生徒の探究活動に対する変化を尋ねた。結果、各項目の肯定的回答率は概ね80%以上であり、多くの教員が本事業を通して生徒の探究活動に一定の変化が生じていると捉えていることが示唆された。

具体的には、発表やプレゼンテーションの仕方を工夫した生徒がいた（93.48%）、自分の探究活動に自信が持てるようになった生徒がいた（93.61%）、探究活動に意欲的に取り組もうと思えるようになった生徒がいた（91.31%）と、肯定的回答率は高い値を示しており、生徒の発表の工夫や意欲の高まりがみられたと多くの教員が感じていることが分かった。

また、情報収集の方法を増やしたり、見直したりした生徒がいた（85.42%）、整理・分析・考察の観点を増やしたり、見直したりした生徒がいた（85.10%）、問いやテーマを具体的にしたり、変えたりした生徒がいた（82.98%）の項目の肯定的回答率も高く、探究活動の各プロセスにおいて、生徒が取り組み方を見直したり工夫したりする様子がみられたと教員が評価していた。

一方で、探究活動に関するスケジュールを自分で立てたり、計画的に準備したりできるようになった生徒がいた（76.09%）は、他の項目と比較するとやや低い値であった。この項目のみ、生徒の回答の肯定的回答率（86.63%）と大きな差がある項目であった。

図表4-6 探究活動に対する効果（教員アンケート）

	とても そう 思う	少し そう 思う	あまり そう 思 わない	全く そ う 思 わ ない	分 か ら な い	肯 定 的 回 答 率	項 目 平 均
本事業を通して、問いやテーマを具体的にしたり、変えたりした生徒がいたと思う	13	26	7	1	3	82.98	3.09
本事業を通して、情報収集の方法を増やしたり、見直したりした生徒がいたと思う	15	26	6	1	2	85.42	3.15
本事業を通して、整理・分析・考察の観点を増やしたり、見直したりした生徒がいたと思う	12	28	6	1	3	85.10	3.09
本事業を通して、発表やプレゼンテーションの仕方を工夫した生徒がいたと思う	18	25	2	1	4	93.48	3.30
本事業を通して、探究活動に関するスケジュールを自分で立てたり、計画的に準備したりできるようになった生徒がいたと思う	7	28	8	3	4	76.09	2.85
本事業を通して、自分の探究活動に自信が持てるようになった生徒がいたと思う	16	28	3	0	3	93.61	3.28
本事業を通して、探究活動に意欲的に取り組もうと思えるようになった生徒がいたと思う	20	22	4	0	4	91.31	3.35

図表4-7 探究活動に対する効果（教員ヒアリング）

- オンラインで交流をしたあとに、テーマを変更した生徒が複数いた。同年代やサポーターと対話する中で、自分がやりたいことがうまく伝えられなかったということも含め「言ってみて違うと思った」、あるいは他者の発表を聴く中で「こういうテーマで探究していいんだ」と気づき、自分の方向性を見直したケースもあったと思う。
- 自分の考えが他者に当たり前に理解されていると思っているところがあったが、外の人と話している中でそうではないと理解した様子だった。その後、自身のテーマについてきちんと理解しようと生産者に話を聞きに行ったりするなど、行動が具体的になったと感じる。
- 交流の中で、「自分たちのテーマも意外と悪くない」「探究はもっと自由に、楽しんでやっていいのだ」と気づくことができていた。同世代の中で対話が起こっているのので、選択肢が増え、視点に広がり生まれた。

4.1.2.2. 生徒自身に対する効果

生徒の認識

生徒に対して本事業を通じた自分自身に対する変化を尋ねた結果、各項目の肯定的回答率は概ね80%以上であり、本事業への参加を通して多くの生徒が他者との関わり方や自分自身の考え方に変化を感じることがうかがえた。

具体的には、新しい価値観と出会い、自分の考え方や視野が広がった（94.59%）、他者の考えや意見に関心を持てるようになった（95.02%）と、肯定的回答率は高い値を示しており、学校横断型の環境が多様な価値観への気づきや他者理解の促進につながっていることが示唆された。

また、初対面の人と話すことへの抵抗感が少なくなった（86.06%）、他者に自分の考えや意見をわかりやすく伝えられるようになった（90.75%）、オンラインや対面のグループでの話し合いに主体的に参加できるようになった（87.77%）の項目の肯定的回答率も高く、であり、他者とのコミュニケーションや協働的な活動への参加態度にも前向きな変化がみられた。さらに、自分と似た考えに出会い、心強く感じた（83.22%）やICTツール（ZoomやGoogleスライド、PowerPointなど）の使い方が上手になった（83.78%）への肯定的回答率も高く、オンライン環境を活用した協働活動を通して共感や安心感を得ている生徒やICT活用に関するスキルの向上と自覚している生徒も一定数いることが示唆された。

図表4-8 生徒自身に対する効果（生徒アンケート）

	とても 思う	少し 思う	あまり 思わ ない	全く 思わ ない	肯定的 回 答率	項目平均
学校横断型探究プロジェクトを通して、新しい価値観と出会い、自分の考え方や視野が広がったと感じた	367	298	28	10	94.59	3.45
学校横断型探究プロジェクトを通して、自分と似た考えに出会い、心強く感じた	279	306	93	25	83.22	3.19
学校横断型探究プロジェクトを通して、初対面の人と話すことへの抵抗感が少なくなった	307	298	66	32	86.06	3.25
学校横断型探究プロジェクトを通して、他者の考えや意見に関心を持てるようになった	370	298	22	13	95.02	3.46
学校横断型探究プロジェクトを通して、他者に自分の考えや意見をわかりやすく伝えられるようになった	304	334	46	19	90.75	3.31
学校横断型探究プロジェクトを通して、オンラインや対面のグループでの話し合いに主体的に参加できるようになった	306	311	64	22	87.77	3.28
学校横断型探究プロジェクトを通して、ICTツール（ZoomやGoogleスライド、パワーポイントなど）の使い方が上手になった	282	307	93	21	83.78	3.21

図表4-9 生徒自身に対する効果（生徒ヒアリング）

- 生徒間交流やコアサポーターとの対話を通して、初対面の人と話すことが自分にとって大きなきっかけになるとわかった。元々は人と話すのが得意ではなかったのですが、第1回合同授業のときはあまり乗り気ではなかったが、個別交流を通じて次第に自分から話すことが得意になってきて、第3回合同授業では自分から発言することができるようになった。また先日校内であった探究発表会では、初対面の下級生に自分から話かけることができた。対話の繋げ方や、新しい話題の出し方がわかるようになったのは、オンラインでの交流のおかげ。（2年生／合同授業・生徒間交流・コアサポーター制度に参加）

教員の認識

また、教員に対しても本事業を通じた生徒自身の変化を尋ねた。結果、各項目の肯定的回答率は概ね80%以上であり、多くの教員が本事業を通して生徒の他者理解やコミュニケーションに関する態度に変化がみられたと認識していることが示された。

具体的には、新しい価値観と出会い、自分の考え方や視野が広がった生徒がいた（97.87%）、初対面の人と話すことへの抵抗感が少なくなった生徒がいた（97.83%）、自分と似た考えに出会い、心強く感じた生徒がいた（95.65%）の項目への肯定的回答率は非常に高い値を示しており、学校横断型の環境が多様な価値観への気づきや安心感の形成につながっていると教員が感じていることが示唆された。

また、他者の考えや意見に関心が高まった生徒がいた（95.65%）、他者に自分の考えや意見をわかりやすく伝えられるようになった生徒がいた（95.75%）、ICTツール（ZoomやGoogleスライド、PowerPointなど）の使い方が上手になった生徒がいた（95.74%）の項目の肯定的回答率も高く、他者とのコミュニケーション能力の向上やICT活用能力の向上がみられたと教員が評価していた。

他の項目と比較すると、グループでの話し合いに主体的に参加できるようになった生徒がいた（82.61%）はやや低い値であったが、80%以上の肯定的回答率であり、教員は生徒の教員自身に対する変化を高く認識していることが分かった。

図表4-10 生徒自身に対する効果（教員アンケート）

	とても そう思 う	少しそ う思 う	あまり そう思 わない	全くそ う思わ ない	分から ない	肯定的 回答率	項目平 均
本事業を通して、新しい価値観と出会い、自分の考え方や視野が広がった生徒がいたと思う	21	25	1	0	3	97.87	3.43
本事業を通して、自分と似た考えに出会い、心強く感じた生徒がいたと思う	21	23	2	0	4	95.65	3.41
本事業を通して、初対面の人と話すことへの抵抗感が少なくなった生徒がいたと思う	23	22	1	0	4	97.83	3.48
本事業を通して、他者の考えや意見に関心が高まった生徒がいたと思う	19	25	2	0	4	95.65	3.37
本事業を通して、他者に自分の考えや意見をわかりやすく伝えられるようになった生徒がいたと思う	18	27	2	0	3	95.75	3.34
本事業を通して、グループでの話し合いに主体的に参加できるようになった生徒がいたと思う	15	23	8	0	4	82.61	3.15
本事業を通して、ICTツール（ZoomやGoogleスライド、パワーポイントなど）の使い方が上手になった生徒がいたと思う	25	20	1	1	3	95.74	3.47

図表4-11 生徒自身に対する効果（教員ヒアリング）

- こうしてライブ感がある中で対話をする機会は少ない。表現という意味で、効果を感じた。
- このプロジェクト以外でもZoomを使用する機会があったが、合同授業を通じて使い方に慣れていった結果、生徒のみで接続ができるようになった。

4.1.2.3. 令和6年度との比較

令和6年度の生徒への調査では、「オンライン合同授業の参加を通じて、自分の探究活動に関して変化がありましたか」、「オンライン合同授業の参加を通じて、自分自身に関して変化や成長がありましたか」の2項目についてアンケート調査を実施した。一方、令和7年度の調査では、オンライン合同授業以外の実施プログラムを含む本事業全体に対して、かつ上記の項目のように具体的な表現を用いた複数の項目で調査を行った。なおオンライン合同授業以外の実施プログラム（生徒間交流やコアサポート制度など）の活用に関しては年間30～40件程度であり、多くの生徒がオンライン合同授業のみを経験しているのが現段階での状況である。

設問の内容や形式が異なることから、令和6年度と令和7年度の結果を単純に比較することはできないが、各項目において「とてもそう思う」「少しそう思う」を肯定的回答と捉え、探究活動に対する変化に関する項目・自分自身に対する変化に関する項目のいずれかに肯定的回答がみられた場合には、当該領域について何らかの肯定的な変化が生じていると解釈することとした。

結果、自らの探究活動について肯定的な変化が生じている生徒は全体の97.43%、自分自身について肯定的な変化が生じている生徒は全体の98.15%であった。令和6年度の探究活動に対する変化に関する項目（オンライン合同授業の参加を通じて、自分の探究活動に関して変化がありましたか）への肯定的回答率は35.70%、自分自身についての変化に関する項目（オンライン合同授業の参加を通じて、自分自身に関して変化や成長がありましたか）への肯定的回答率は50.30%であったことから、令和6年度よりも効果を認識している生徒が多いことが示唆された。

下記の表に、探究活動に対する変化（7項目）、自分自身に対する変化（7項目）の各項目へ「とてもそう思う」「少しそう思う」とした生徒の回答数別人数および構成比を示す。例えば、探究活動に対する変化に関して回答数7に該当する生徒は、探究活動に対する変化に関するすべての項目（7項目）に「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答していることを表し、回答数0に該当する生徒は、探究活動に対する変化に関するいずれの項目にも「とてもそう思う」「少しそう思う」の回答していないことを表す。

図表4-12 探究活動に対する変化（7項目）について
「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した生徒

回答数	人数	構成比 (%)
0	18	2.56
1	10	1.42
2	11	1.56
3	19	2.7
4	31	4.41
5	46	6.54
6	120	17.07
7	448	63.73
合計	703	100

図表4-13 自分自身に対する変化（7項目）について
「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した生徒

回答数	人数	構成比 (%)
0	13	1.85
1	8	1.14
2	15	2.13
3	15	2.13

4	27	3.84
5	53	7.54
6	93	13.23
7	479	68.14
合計	703	100

生徒の認識と同様に教員の認識についても令和6年度と比較を行った。比較項目の肯定的回答率の算出方法は、上述の通りである。その結果、探究活動について肯定的な変化が生じていると認識している教員は全体の94.00%であり、生徒自身について肯定的な変化が生じていると認識している教員は、全体の94.00%であった。令和6年度の探究活動に対する変化に関する項目（本事業への参加を通じて、生徒の探究活動に関して変化がありましたか）への肯定的回答率は76.60%、生徒自身に対する変化に関する項目（本事業への参加を通じて、生徒自身に変化や成長がありましたか）への肯定的回答率は80.90%であった。下記の表に、生徒の探究活動に対する変化（7項目）、生徒自身に対する変化（7項目）の各項目へ「とてもそう思う」「少しそう思う」とした教員の回答数別人数および構成比を示す。

図表4-14 探究活動に対する変化（7項目）について
「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した教員

回答数	人数	構成比 (%)
0	3	6
1	1	2
2	3	6
3	2	4
4	1	2
5	4	8
6	5	10
7	31	62
合計	50	100

図表4-15 自分自身に対する変化（7項目）について
「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した教員

回答数	人数	構成比 (%)
0	3	6
3	1	2
4	2	4
5	3	6
6	6	12
7	35	70
合計	50	100

4.1.3. オンライン連携を通じた教員に対する効果

4.1.3.1. 教員の探究への関わり方に対する効果

続いて、教員に本事業を通じた自身の探究活動に対する意識の変化を尋ねたところ、各項目の肯定的回答率は68%～80%の範囲にあった。生徒の変化に対する評価と比べるとやや低いものの、本事業を通して変化を感じている教員が一定数いることがうかがえた。

具体的には、自校の探究活動を推進していく際のアイデアを得た（80.00%）、教員として探究活動に関わるモチベーションが向上した（78.00%）と、肯定的回答率は比較的高い値を示しており、学校横断型の交流が教員同士のアイデア獲得やモチベーションにつながっていることが示唆された。

また、自分自身の声かけ（助言、問いかけ等）が変わった（68.00%）、生徒に対して提案したり、接続できる先（ヒアリング先など）が増えた（68.00%）の項目では、肯定的回答率は他の項目と比べてやや低い値となった。

図表4-16 教員の探究活動への関わり方に対する効果（教員アンケート）

	とても そう 思う	少し そう 思う	あまり そ う 思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い	肯定的 回 答 率	項目平均
本事業を通して、自分自身の声かけ（助言、問いかけ等）が変わった	12	22	13	3	68.00	2.86
本事業を通して、生徒に対して提案したり、接続できる先（ヒアリング先など）が増えた	18	16	13	3	68.00	2.98
本事業を通して、教員として探究活動にかかわるモチベーションが向上した	14	25	9	2	78.00	3.02
本事業を通して、自校の探究活動を推進していく際のアイデアを得た	16	24	8	2	80.00	3.08

図表4-17 教員の探究活動への関わり方に対する効果（教員ヒアリング）

- 合同授業の時の見守りやトラブル対応のため、学年団の先生に入っていた。中には元々探究活動に積極的ではない先生もいたが、巡回して生徒や他校の生徒の様子を見たことで日頃の活動にも関わってくれるようになった。他の学校の生徒の発表の様子や、自校の生徒たちの前向きな様子を見て何かしら感じるものがあったのではないかな。

4.1.3.2 教員自身に対する効果

続いて、本事業を通じた教員自身の変化について尋ねた。各項目の肯定的回答率は概ね78%以上であり、多くの教員が本事業を通して何らかの変化を感じていることがうかがえた。

例えば生徒の新たな一面や成長に気づくことができた（92.00%）の項目は、肯定的回答率は特に高い値を示しており、学校横断型の活動を通して、教員が普段の学校生活では見えにくい生徒の姿や成長に気づく機会となっていることが示唆された。

また、ICTツール（ZoomやGoogleスライド、PowerPointなど）の使い方に自信が持てるようになった（80.00%）、外部の人や団体とつながることに抵抗が少なくなった（78.00%）の肯定的回答率も比較的高く、オンラインツールの活用や外部との連携に対する意識にも一定の変化がみられた。

図表4-18 教員自身に対する効果（教員アンケート）

	とても そう 思う	少し そう 思う	あまり そ う 思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い	肯定的 回 答 率	項目平均
本事業を通して、生徒の新たな一面や成長に気づくことができた	27	19	4	0	92.00	3.46
本事業を通して、外部の人や団体とつながることに抵抗が少なくなった	18	21	10	1	78.00	3.12

本事業を通して、ICTツール（ZoomやGoogleスライド、パワーポイントなど）の使い方に自信が持てるようになった	15	25	9	1	80.00	3.08
--	----	----	---	---	-------	------

図表4-19 教員自身に対する効果（教員ヒアリング抜粋）

- 他の学校の事例を見ることができたのが大きかった。他の学校の生徒達と、どんどん交流させたいなと思った。今後異動で大規模校に行っても、生徒も教員も外部との交流をしたほうが良いと感じる。

4.1.3.3. 令和6年度との比較

教員自身への認識についても令和6年度と比較を行った。比較項目の肯定的回答率の算出方法は、上述の通りである。その結果、探究活動への関わり方について肯定的な変化が生じていると認識している教員は全体の45.00%であり、自身について肯定的な変化が生じていると認識している教員は全体の49.00%であった。令和6年度の探究活動への関わり方に関する項目（本事業への参加を通じて、先生ご自身の探究活動への関わり方に関して変化がありましたか）への肯定的回答率は63.80%、自身の変化についての項目（本事業への参加を通じて、探究活動に関すること以外でご自身に変化がありましたか）への肯定的回答率は40.40%であった。下記の表に、自身の探究活動への関わり方に対する変化（4項目）、教員自身に対する変化（3項目）の各項目へ「とてもそう思う」「少しそう思う」とした教員の回答数別人数および構成比を示す。

図表4-20 自身の探究活動への関わり方に対する変化（4項目）について

「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した教員

回答数	人数	構成比 (%)
0	5	10
1	5	10
2	6	12
3	6	12
4	28	56
合計	50	100

図表4-21 自身に対する変化（3項目）について

「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した教員

回答数	人数	構成比 (%)
0	1	2
1	6	12
2	10	20
3	33	66
合計	50	100

4.1.3.4. 本事業への関わりと効果の関係

最後に、各教員の本事業への関わり方や各種教員向けプログラムへの参加有無によって、上記で記した効果に違いが生じるのかを調べた。まず、本事業における教員の関わり方は概ね以下のように整理される。

図表4-22 本事業における教員の関わり方

オンライン合同授業の打ち合わせ会や振り返り会に参加する オンライン合同授業当日、教室で交流の様子を見まわる オンライン合同授業当日、オンラインで交流の様子を見まわる 自分の生徒にコアサポーター制度や生徒間交流の活用を検討する 教員向けSlackコミュニティの投稿やポータルサイトを定期的に関覧する 事務局主催の教員向けイベント（※）に参加する
--

（※）本プログラムにて令和7年度実施された教員向けイベントには、全教員を対象に本事業の概要やオンライン会議システムの基本操作を説明した「プロジェクト説明会」、夏期休暇中に連携校教員を登壇者として地域を巻き込んだ探究活動のあり方をテーマに実施した「合同ミーティング」、探究活動と進路の接続をテーマに実施した「テーマ別分科会」がある。

●オンライン合同授業の打ち合わせ会や振り返り会への参加

オンライン合同授業の前には、各校の代表者（主に窓口教員）を対象に打ち合わせ会および振り返り会を実施している。探究活動への関わり方に対する変化、教員自身に対する変化に関する全ての項目において、参加した教員の方が肯定的回答率が高かった。特に「生徒に対して提案したり、接続できる先（ヒアリング先など）が増えた」は、参加の有無で肯定的回答率が30%以上高かった。オンライン合同授業の打ち合わせ会や振り返り会では、生徒アンケートに基づき、コアサポーター制度や生徒間交流の活用について具体的な紹介を行っており、こうした取り組みが意識の変化に繋がった可能性がある。

●オンライン合同授業当日の教室の見回り

オンライン合同授業当日は、生徒の接続トラブル対応等のため、多くの学校で複数の教員が教室を巡回している。このような役割を担った教員の方が、そうでない教員よりも、「教員として探究活動にかかわるモチベーションが向上した」、「生徒の新たな一面や成長に気づくことができた」、「外部の人や団体とつながることに抵抗が少なくなった」「ICTツール（ZoomやGoogleスライド、パワーポイントなど）の使い方に自信が持てるようになった」の項目で肯定的回答率が高かった。ただし実施の有無による差は、9.85%~12.88%で、他の関わり方と比較すると差が小さかった。

●オンライン合同授業当日のオンラインでの見回り

オンライン合同授業当日は、上述のような教室での見回りに加えて、オンライン上でブレイクアウトルームを巡回し交流活動の様子を観察する教員も多い。こうしたオンライン上での見回りを実施した教員の方が、そうでない教員よりも探究活動への関わり方に対する変化、教員自身に対する変化全ての項目において、肯定的回答率が高かった。また、「生徒の新たな一面や成長に気づくことができた」を除く全ての項目で、実施の有無による肯定的回答率の差は、10%以上であり、他取組よりも実施の有無による肯定的回答率の差が大きかった。特に、探究活動への関わり方に対する変化の「生徒に対して提案したり、接続できる先（ヒアリング先など）が増えた」と教員自身に対する変化の「ICTツール（ZoomやGoogleスライド、パワーポイントなど）の使い方に自信が持てるようになった」は、実施の有無で肯定的回答率が20%以上の差があった。

●コアサポーター制度や生徒間交流の活用の検討

本事業において、連携校が任意で活用可能な「コアサポーター制度」や「生徒間交流」を自校の生徒に対して検討した教員は、「自分自身の声かけ（助言、問いかけ等）が変わった」「生徒に対して提案したり、接続できる先（ヒアリング先など）が増えた」「自校の探究活動を推進していく際のアイデアを得た」、「外部の人や団体とつながることに抵抗が少なくなった」「ICTツール（ZoomやGoogleスライド、パワーポイントなど）の使い方に自信が持てるようになった」の項目で、そうでない教員よりも肯定的回答率が高かった。特に、「生徒に対して提案したり、接続できる先（ヒアリング先など）が増えた」と「ICT

ツール（ZoomやGoogleスライド、パワーポイントなど）の使い方に自信が持てるようになった」は、実施の有無で肯定的回答率に20%以上の差があった。

●Slackの投稿やポータルサイトを定期的な閲覧

本事業では、教員向けコミュニティの活性化を目的として定期的にSlackやポータルサイトでの情報共有を実施している。こうした情報を定期的に閲覧している教員は、そうでない教員よりも探究活動への関わり方に対する変化、教員自身に対する変化全ての項目について肯定的回答率が高かった。特に、「ICTツール（ZoomやGoogleスライド、パワーポイントなど）の使い方に自信が持てるようになった」が増えた」は、参加の有無で肯定的回答率に19.04%の差があった。

図表4-23 関わり方等の違いによる教員の変化に関する項目の肯定的回答率（教員アンケート）

	オンライン合同授業の打ち合わせ会や振り返り会に参加した		オンライン合同授業当日、教室で交流の様子を見まわった		オンライン合同授業当日、オンラインで交流の様子を見まわった		自分の生徒にコアサポーターや生徒間交流の活用を検討した		Slackの投稿やポータルサイトを定期的な閲覧した		事務局主催の教員向けイベントに参加した	
	参加あり 24人	参加なし 26人	実施あり 44人	実施なし 6人	実施あり 29人	実施なし 21人	実施あり 12人	実施なし 38人	実施あり 15人	実施なし 35人	参加あり 3人	参加なし 47人
他校の教員やサポーターの生徒への関わり方を知ること、自分自身の声かけ（助言、問いかけ等）が変わった	75	61.54	65.91	83.33	72.41	61.9	75	65.79	80	62.86	100	65.96
生徒に対して提案したり、接続できる先（ヒアリング先など）が増えた	87.5	50	65.91	83.33	79.31	52.38	83.33	63.16	80	62.86	100	65.96
教員として探究活動にかかわるモチベーションが向上した	83.33	73.08	79.55	66.67	86.21	66.67	75	78.95	80	77.14	100	76.6
似通った課題感を持つ他校教員と交流することを通して、自校の探究活動を推進していく際のアイデアを得た	83.33	76.92	79.55	83.33	86.21	71.43	83.33	78.95	86.67	77.14	100	78.72
生徒の新たな一面や成長に気づくことができた	95.83	88.46	93.18	83.33	93.1	90.48	71.33	72.81	100	88.57	100	91.49
外部の人や団体とつながることに抵抗が少なくなった	87.5	69.23	79.55	66.67	82.76	71.43	91.67	73.68	86.67	74.29	100	76.6
ICTツール（ZoomやGoogleスライド、パワーポイントなど）の使い方に自信が持てるようになった	91.67	69.23	79.55	66.67	89.66	66.67	100	73.68	93.33	74.29	100	78.72

以上をまとめると、関わり方においては、「生徒に対して提案したり、接続できる先（ヒアリング先など）が増えた」や「ICTツールの使い方に自信が持てるようになった」が他の項目と比較して、取組の実施・参加の有無により差が見られる項目であった。学校間連携にかかわる機会を利用する度が高まることで、教員の外部連携の広がりやICT活用への自信の向上につながる可能性がある。

4.2. オンラインでの対話に関する調査

4.2.1. 概要および方法

(1) 活動の満足度に着目した分析

第2回・第3回オンライン合同授業において、ブレイクアウトルームでの生徒及びサポーターの探究発表およびディスカッションの発話内容を分析した。対象は、生徒に実施した事後アンケートの中で、プログラム全体の満足度にあたる「今回のオンライン合同授業全体について、あてはまるものを選んでください」の項目で、平均スコアの上位5グループと、下位2グループ、合計7グループとした。録画データを確認

しながら、生徒が他者との対話を通して新たな視点・アイデアを得たポイントや、サポーターの効果的な支援等に着目した。

図表4-24

調査目的	オンライン合同授業における交流活動の質向上のための条件および課題把握
調査方法	第2回・第3回オンライン合同授業におけるブレイクアウトルームの録画データの分析
調査対象	第2回・第3回合同授業に参加した生徒およびサポーター
調査時期	2025年11月～2026年2月

その結果、プログラム満足度の高いグループと低いグループで、それぞれ以下の特徴がみられた。

図表4-25

満足度の高いグループ	<ul style="list-style-type: none"> ● 生徒が事前に準備していた自身の探究に関わる質問について、質疑応答のサイクルが生徒同士で自然に構築された。 ● サポーターが、生徒の発表を承認・受容し、生徒の探究を引き出す質問をしたりアイデアやアドバイスを伝えるなど、多岐にわたるフィードバックを提供した。
満足度の低いグループ	<ul style="list-style-type: none"> ● 司会生徒が、グループワークの時間を発表の場としてだけ捉えており、他の生徒と対話したりサポーターからアドバイスをもらう場という認識がなく、コメントを求めずに発表の進行に終始した。 ● 同じ教室にいる他グループの生徒同士の私語が目立つ。ZoomのマイクはOFFにしているため、ブレイクアウトルーム内の会話や雰囲気と意識の乖離が生じ、活動が進みづらい。 ● 上記のように教室内で盛り上がったり、生徒の声が聞き取りづらいケースや、発表時にスライド内容を網羅できず深掘りが必要な生徒など、サポーターが介入すべきところで支援ができなかった。

グループでの対話が単なる情報の交換に留まらず、サポーターによる多様な側面からの声かけを通じて新しい問いが生まれたり、既存価値の再発見が起こったりすることで、生徒の満足度が高まる可能性が明らかになった。また発表内容に関する質疑や対話に加えて、発表以外でのフリートークの盛り上がりやグループ内の雰囲気が、満足度のスコアに影響する傾向も一部見られた。

今後も分析対象を広げた調査を行い、効果的なサポーターの支援方略やグループ活動内容の設計等を追究していく余地がある。

5. 成果・課題のまとめ

5.1 本事業を通じた示唆

①オンラインを活用した学びの機会の位置づけ

本事業における学びの機会は、「教育課程内の合同授業」と「個別ニーズに応じた生徒間・サポーターとの連携」の二つに整理できる。合同授業は主に探究成果の発表機会として機能し、探究への意欲向上、多様な視点の獲得、自らの考えを伝える力の育成といった効果が確認された。一方で、自立的に探究を進められる生徒にとっては必須ではないとの構成校からの意見もあった。本形式における上記の特徴を念頭におき、学校の課題意識に応じて適した取組を選択できることが必要である。

図表5-1 教育課程内の合同授業／個別ニーズに応じた生徒間・サポーターとの連携

	対象	活動内容	機能
①合同授業	学年全員	探究活動の相互発表	<ul style="list-style-type: none">・探究活動に対する意欲の向上・多様な視野の獲得・自分の意見を他者へ伝えることへの自信 <p>【効果的な対象者想定】</p> <ul style="list-style-type: none">・探究活動の意欲が高まらない生徒・探究活動の進め方に迷っているが、自分から外部連携の機会をつくりづらい生徒
②サポーター活用 生徒個別交流	希望者	テーマに応じた相談	<ul style="list-style-type: none">・探究活動のテーマに沿った具体的方法やアイデアの獲得 <p>【効果的な対象者想定】</p> <ul style="list-style-type: none">・探究活動の進め方が固まっており、テーマに沿った専門的な意見交換を必要としている生徒・探究活動の進め方に迷っており、個別で丁寧な対話を行いたいと考えている生徒

②探究活動における学校間連携の課題

学校間連携は、各校の日常的な探究活動を促進するきっかけとなり得る。実証では、合同授業を共通マイルストーンとすることで探究活動の後押し材料となった事例が見られた。

一方で、「総合的な探究の時間」における目標は各校で異なるため、到達目標を厳密に統一することは難しい。本連携では、各校で共通化する部分は「合同授業までに目指す状態」を共有するにとどまった。今後は複数校でカリキュラムの一部を共有するなど、より踏み込んだ連携の在り方を検討する余地がある。

③都道府県を超える連携の意義と限界／エリア単位でのプラットフォーム構築

各学校や教員は、大学・研究機関・企業・地域団体などとのつながりを持っているが、それらは個人・学校単位にとどまりやすい。本事業では、こうしたネットワークを持ち寄り、プラットフォーム上で共有することで、サポーターや外部人材の選択肢を広げることができた。

今後の持続可能性の観点からは、関係性を継続的に蓄積できる規模で基盤を構築することが重要となる。そのためには、一定のエリア単位でプラットフォームを整備することが現実的であると考えられる。

④オンラインネットワークの基本的な役割

現地の資源（教員・地域）とオンラインネットワークはそれぞれ異なる強みを持ち、相互補完的な役割を果たすと考えられる。現地の資源（教員・地域）は生徒に寄り添いながら、日常的な指導やフィールドワークの機会を提供し、探究活動を継続的に支援する役割を担う。一方、オンラインネットワークは外部の知見や他校の生徒との交流機会を提供し、探究活動を広げ、深めるための拡張機能となると考えられる。

○探究活動の高度化に向けた現地／オンラインネットワークの役割分担

図表5-2

探究活動の観点	学校内で行われる教育課程 (総合的な探究の時間)	教育課程(総合的な探究の時間)を支える オンラインの機能
整合性(目的と手段の合致)	生徒の背景や状態を理解した個別支援が可能	探究テーマが類似する生徒同士をつなぎ、目的の明確化を支援
効果性(適切な資質・能力の活用)	生徒一人ひとりに対する理解のもとで資質・能力の活用を支援	普段接することのない他者との関わりを通して自分の資質・能力について新たな気づきを得られる
鋭角性(問いの質)	各校の教員が近くで問いの精査をサポートし、指導する	異なる視点を持つ他校の生徒やサポーターからコメントを受け、問いの精度を高める／立てた問いの質を見直す
広角性(幅広い可能性や対象を考慮)	地域社会の多様な課題に直接触れ、フィールドワーク等を通じて視野を広げる	異なる地域・文化の生徒と交流したり、他者の探究活動を聞いたりして多角的視点を養う
自己課題(探究活動と自分とのつながり)	担任や学校の教員が生徒の個人的な興味・関心を理解し、探究テーマ設定を手助けをする	オンラインでの発表を通じて自己の学びを言語化し、整理する機会を得る
社会参画(学んだことを社会に還元)	在住地域でのフィールドワークや発表等を通じて、実社会と関わる	探究活動の価値や意味づけについて、サポーターや他校生徒から新たな視点を得られる
意欲(探究活動を深めようとする姿勢)	学校の教員が日々の学習の中で伴走し、継続的なモチベーションを支援	他校の生徒と意見交換することで刺激を受け、探究への自信を深める

⑤コーディネート機能の必要性

学校間連携や外部資源の活用を持続させるには、継続的なコーディネート機能が不可欠である。教員が通常業務に加えて他校や外部との調整を担い続けることには限界があり、合同授業外の連携は自然発生的には継続しにくい。連携の継続により学校間の相互理解が深まることで、調整は次第に円滑になり、コミュニケーションコストの低減も期待できる。実際に、ICT支援員や既存の地域コーディネーターが運営を補完する事例も見られ、既存人材の活用による体制構築の可能性が示された。

地理的条件や学校規模等の制約を超えて、複数校が連携して多様な探究テーマを相互補完するプラットフォームの構築と連携活動の実施には、ネットワークにつながる資源を共有化し、活動の機会をコーディネートする機能の確保が必要である。

5.2 . 今後の高校教育改革への展望

今後、高等学校教育においては、多様な進路や学習ニーズに対応するための環境整備が一層求められていくこととなる。本事業を通じて取り組んだ都道府県の枠組みを超えた探究プラットフォーム構築は、生徒にとってより柔軟で多様な学びの機会を提供していくための重要な手段となり得る。

本報告で整理した実践や課題、今後の方向性が、各地域や学校における取組の検討に資する資料となり、今後の高校教育の改革を進めていく上での一助となることを期待したい。